豊富村埋蔵文化財調査報告第５集

山梨県東八代郡豊富村

平成９年度
村内遺跡発掘調査報告書

1998

豊富村教育委員会

豊富村埋蔵文化財調査報告第５集

山梨県東八代郡豊富村

平成９年度
村内遺跡発掘調査報告書

1998

豊富村教育委員会

序

豊富村は甲府盆地の南部に位置し、北に笛吹川が流れ、南に御坂山塊が東西に連なり、とても自然豊かな村です。そして曽根丘陵の台地上を中心に古代遺跡が多数眠っていたり、中世の初めにこの地一帯を支配していた甲斐源氏の一族浅利与一公の墓塔が大福寺に代々守られてきたりなど、歴史的環境にも恵まれています。

豊富村では近年、シルクの里公園へのアクセス道路としてシルクラインやふるさと農道の建設、笛吹川沿いの国道140号線に本村の情報の発信源として期待される交流促進センターの建設など、地域活性化の促進のためにさまざまな開発が行われています。また民間でも宅地開発や個人住宅の建設など各種の開発が相次いでおります。このような開発が埋蔵文化財包蔵地で行われるためにまず遺跡有無の確認調査をしていきます。

本報告書は平成9年度に実施した豊富村内における各種開発に伴う埋蔵文化財有無の確認調査の結果をまとめたものです。高部宇山平遺跡では縄文時代中期初頭の住居跡、弥二郎遺跡で弥生時代後期の住居跡が確認されたり、横畑遺跡ではかつて昭和60年に山梨県教育委員会で調査が行われましたが、この時に発見された遺構群の分布が今回の調査でさらに広がることがわかりました。今回発見されたのは戦国時代から江戸時代にかけての土坑や小穴であり、この時期の遺構・遺物の発見は本村の他の遺跡ではあまり例がないので大変貴重な発見といえましょう。なお今回の調査にあたり、ご指導・ご協力をいただきました地元地権者の方々をはじめ、関係各位に厚く感謝申し上げます。

本報告書が今後、有意義に活用されることを希望いたします。

1998年3月31日

豊富村教育委員会
教育長　**萩　原　保　正**

例　　言

1．本書は平成９年度に山梨県東八代郡豊富村内で発掘された遺跡調査の報告書である。

2．発掘調査は文化庁・山梨県より補助金を受けて、豊富村教育委員会が実施した。

3．発掘調査及び出土品の整理は、豊富村教育委員会が実施した。

4．本書における出土品及び記録図面・写真は豊富村教育委員会が保管している。

5．本報告書の執筆・編集・写真撮影は岡野が行った。

6．本調査にあたり、山梨県教育庁学術文化財課及び豊富村各区の住民の皆様、地権者の皆様にご指導・ご理解をいただきながら調査を進めることができた。心から謝意を表する次第である。

7．発掘調査・出土品の整理及び報告書の作成については、次の方々からご教示・ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。

（敬称略）

小野正文・出月洋文・森原明廣・中山誠二（山梨県教育庁学術文化課）、林部光（中道町教育委員会）、野崎進（境川村教育委員会）、伊藤修二（八代町教育委員会）、望月和幸（御坂町教育委員会）、小渕忠秋（石和町教育委員会）、瀬田正明（一宮町教育委員会）、猪股喜彦（釈迦堂遺跡博物館）、櫛原功一（帝京大学山梨文化財研究所）

調　査　組　織

調査主体	豊富村教育委員会
調査担当者	岡野秀典
事務局	萩原保正（教育長）・中込清彦（教育課長）・今井賢（教育係長）・井上妙・柿嶋正宣・中楯紀男・井上陽子
調査・整理	相原ツネ子・有泉つや子・有泉ふくじ・石原喜代の・石原次代・長田長美
参加者（敬称略）	長田晴美・河野紀久代・小林英子・小林芳次・桜井里子・桜井幸子・高野萬千子・田中喜和子・塚田よ志江・中沢浦子・萩原定子・萩原まつ江・村松俊江・山口喜代・渡辺きく江

目　　次

序
例言・調査組織
目次
第１章　平成９年度の調査概要……1
第２章　地理的歴史的環境……2
第３章　代中遺跡の調査……4
第４章　高部宇山平遺跡の調査……6
第５章　横畑遺跡の調査……12
第６章　代中東遺跡の調査……20
第７章　弥二郎遺跡の調査……23
引用・参考文献……31

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図(1/25,000)……3
第２図　調査区位置図(1/10,000)……4
第３図　調査区全体図・平面図・土層図…5
第４図　調査区位置図……6
第５図　土層図……7
第６図　全体図……8
第７図　１号住居址……9
第８図　出土土器・石器……10
第９図　調査区位置図……12
第10図　土層図 (1) ……13
第11図　土層図 (2) ……14
第12図　全体図……15
第13図　第３区……17
第14図　第４区……18
第15図　出土土器……18
第16図　調査区位置図……20
第17図　全体図……21
第18図　土層図……22
第19図　出土土器・石器……22
第20図　調査区位置図……23
第21図　土層図 (1) ……24
第22図　土層図 (2) ……25
第23図　土層図 (3) ……26
第24図　土層図 (4) ……27
第25図　全体図……28
第26図　１号住居址……29
第27図　２号住居址……30
第28図　出土土器……30

写 真 図 版 目 次

図版１　代中遺跡
調査前風景　完掘状況
図版２　高部宇山平遺跡
調査前風景　作業風景　１号住居址　１号住居址埋甕
埋甕内側　埋甕外側　磨石　縄文土器
図版３　横畑遺跡（1）
調査前風景　作業風景　１区完掘　１号竪穴状遺構
１号土坑　２号土坑
図版４　横畑遺跡（2）
５区完掘　かわらけ　かわらけ　陶磁器（上・外面　下・内面）
縄文土器　内耳土器　融解物付着土器　かわらけ・縄文土器
図版５　代中東遺跡
調査前風景　１区完掘　２区完掘　石器・縄文土器　縄文土器
図版６　弥二郎遺跡
調査前風景　５区完掘　１号住居址　２号住居址
弥生土器・縄文土器　縄文土器

第1章　平成9年度の調査概要

No.	収遺跡名	ふりがな	所在地	コード		調査期間	調査面積（㎡）	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
				市町村	遺跡番号							
			山梨県東八代郡豊富村	19328								
1	代中	だいちゅう	木原1213-1		県 7 村 6	970630	4	個人住宅建設	散布地	縄文・古墳	なし	縄文土器
2	高部宇山平	たかべうやまだいら	高部1570他		県 9 村 3	970819 ～ 970826	80	個人住宅建設	集落跡	縄文・弥生・古墳・中近世	住居跡1軒	縄文土器・石器・土師器
3	横畑	よこばたけ	大鳥居3560-1他		県 21 村 46	971006 ～ 971015	58	村道ふるさと農道大鳥居線建設	集落跡	先土器～中近世	竪穴状遺構・土坑・小穴	縄文土器・石器・かわらけ
4	代中東	だいちゅうひがし	木原1267-1他		県 村 7	971020	8	個人住宅建設	散布地	縄文・平安・近世	なし	縄文土器・石器
5	弥二郎	やじろう	関原942他		県 22 ・23 村 15	971209 ～ 971216	231	土砂採取	集落跡	先土器～古墳・中世	住居跡2軒	縄文土器・石器・弥生土器

第２章　地理的歴史的環境

豊富村は、山梨県のほぼ中央、甲府盆地の南端に位置する。地形的に見ると、御坂山塊の北斜面の山地と曽根丘陵台地、浅利川流域の平坦地、及び笛吹川流域の沖積地とに分かれる。

村の南西は、標高650～950mに及ぶ急峻な御坂山塊の北面斜面の山地に占められ、これらの山地から平地に移る尾根の末端部に標高240～380mで強粘土質からなるローム層で覆われた曽根丘陵が広がっている。御坂山塊の関原峠の山腹に源流を発する浅利川が村の中心に流れており、その浅利川流域に沿って集落が発達している。浅利川が笛吹川に注ぐ一帯は、沖積地形であり、かつての氾濫原である。現在は、明治以来の区画整理以降、水田が広がっている。

豊富村の遺跡分布は、曽根丘陵の台地上で占める。その初現として、横畑遺跡、弥二郎遺跡から先土器時代のナイフ形石器が出土している。

それに続く縄文時代の遺跡は、35か所確認されている。その中で、駒平遺跡は中期前半を主体とし、横畑遺跡では、中期後半の住居址が検出した。高部宇山平遺跡においては、後期中葉の土坑から注口土器の完形品が出土するなど、前期から後期にわたって遺構・遺物が各遺跡から出土している。

弥生時代は、14か所に分布している。城原遺跡で表採された壷や甕の破片が前期末から中期初頭にかけてのものであり、これらを初源として弥二郎遺跡では後期の住居址３軒、横畑遺跡で後期の住居址３軒が検出されている。

古墳時代は、散布地が24か所で、古墳が25基あるが、その多くの墳丘が削平されている。その分布として、５世紀後半の王塚古墳を中心とする宇山平古墳群、６世紀前半とされる三星院古墳を中心とする三星院古墳群、城原古墳群、田見堂及鳥居原古墳群の４群からなる。

奈良・平安時代の豊富村一帯は、『和名抄』によると、八代郡沼尾（ぬまのお）郷に属するとされるが、現在この沼尾郷に比定できるような遺跡は見つかっていないが、横畑遺跡で10世紀後半以降の住居址が３軒検出されている。

中世になると、甲斐源氏の一族浅利与一義成の支配する所となり、その伝承も村内各地に残り、高さ３ｍの層塔形式を呈する浅利与一の墓塔も大鳥居に所在する大福寺に伝わっている。また、三星院門前の小丘が戦国時代の武田家家臣三枝土佐守虎吉の館跡といわれる。戦国時代から近世にかけての遺跡として、横畑遺跡がある。竪穴状遺構や方形プランの土坑・小穴群などの遺構やかわらけ・陶磁器・融解物付着土器などの土器類が出土するなど、この時期の状況の一端を示す資料も検出している。

1．明治遺跡	2．地蔵田遺跡	3．高部宇山平遺跡	4．宇山遺跡
5．中尾遺跡	6．代中遺跡	7．代中東遺跡	8．関沢遺跡
9．三枝氏館跡	10．上野原遺跡	11．駒平遺跡	12．高内遺跡
13．上三口西遺跡	14．上三口遺跡	15．弥二郎遺跡	16．東原遺跡
17．原遺跡	18．中原遺跡	19．浜井場遺跡	20．付山南遺跡
21．付山北遺跡	22．神田南遺跡	23．神田北遺跡	24．旧三星院跡
25．駒原遺跡	26．柿戸原遺跡	27．柿戸原南遺跡	28．山口遺跡
29．宮の下遺跡	30．熊野原遺跡	31．浅利氏館跡	32．大鳥居宇山平遺跡
33．釜池西遺跡	34．釜池東遺跡	35．浜井戸遺跡	36．城原遺跡
37．見間北遺跡	38．見間遺跡	39．椚田遺跡	40．椚田北遺跡
41．南大森遺跡	42．西の沢遺跡	43．宮の脇遺跡	44．久保遺跡
45．川東遺跡	46．横畑遺跡	47．久保田遺跡	48．前田遺跡
49．伊勢塚古墳	50～52．無名墳	53．三星院古墳	54～61．無名墳
62．おさんこうじ古墳	63．金塚古墳	64．王塚古墳	65．二子塚古墳
66～68．無名墳	69．城原大塚古墳	70～72．無名墳	73．お御崎さん古墳

第１図　周辺遺跡分布図(1/25,000)

第３章　代中遺跡の調査

第１節　調査に至る経過

東八代郡豊富村木原字代中に所在し、曽根丘陵西側の一角に広がる東西に延びる台地上に立地する。

当遺跡の東端で個人住宅建設の計画があり、試掘調査を実施した。調査面積は４㎡である。

平成９年（1997）６月30日　発掘調査を開始・終了
平成９年（1997）６月30日　文化庁に発掘報告を提出

第２節　調査方法及び基本層序

調査方法は調査対象地に応じて２×２ｍの試掘坑を１か所設定して掘り下げた。

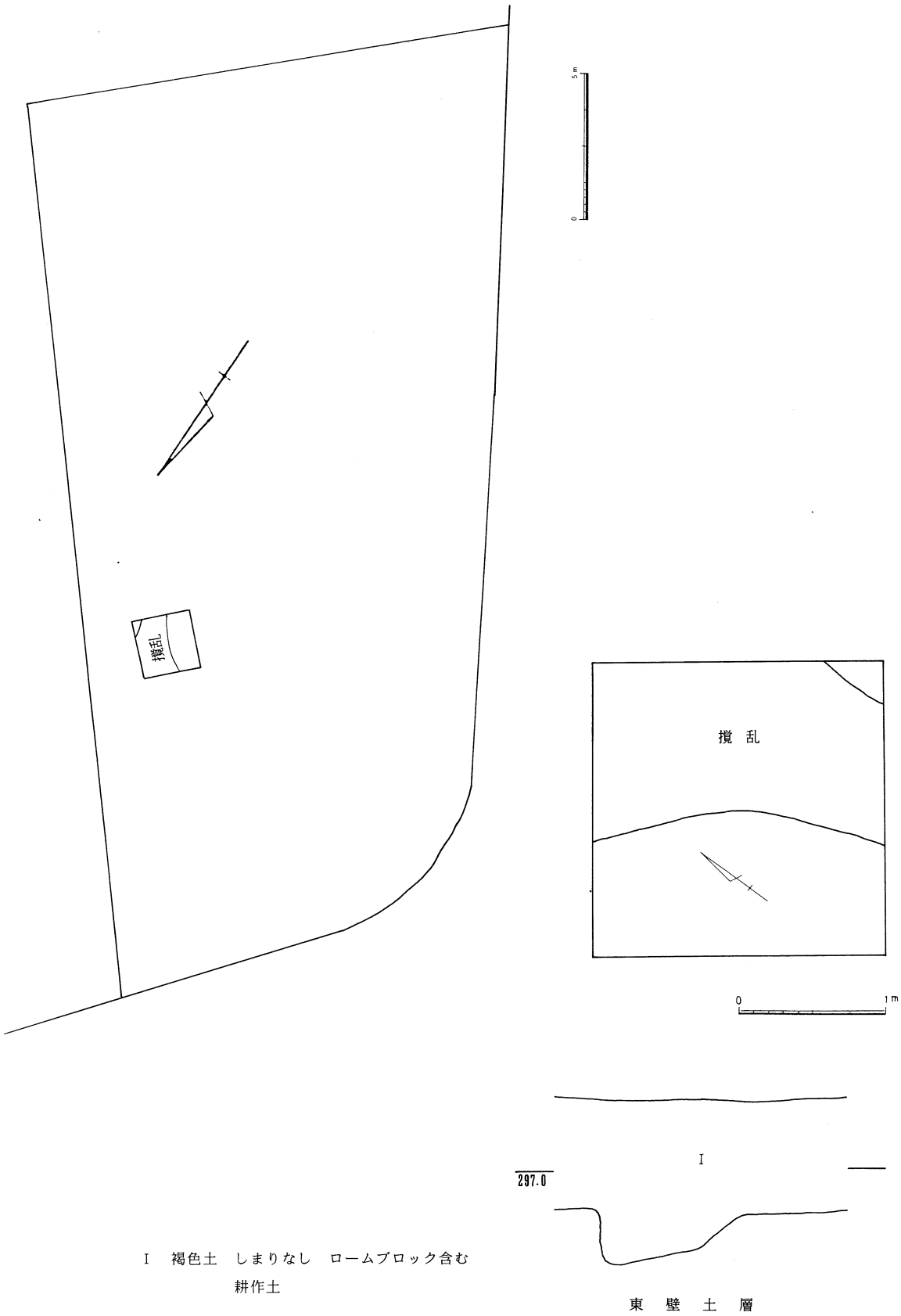
基本層序は次のとおりである。なお、地表から第Ⅱ層までの深さは80㎝前後である。

第Ⅰ層　褐色土（耕作土）　　第Ⅱ層　黄褐色ローム

第３節　調査の結果

調査の結果、ローム面は耕作による撹乱を受けており遺構の検出はなく、縄文土器の破片が１点出土しただけである。

第２図　調査区位置図(1/10,000)



第3図　調査区全体図・平面図・土層図

第４章　高部宇山平遺跡の調査

第１節　調査に至る経過

東八代郡豊富村高部字伊勢塚に所在し、甲府盆地の南側から東側に連なる曽根丘陵を形成する宇山平と呼ばれる台地上の北側に立地する。

当遺跡内の北端で個人住宅の計画があり、試掘及び本調査を実施した。調査面積は80㎡である。

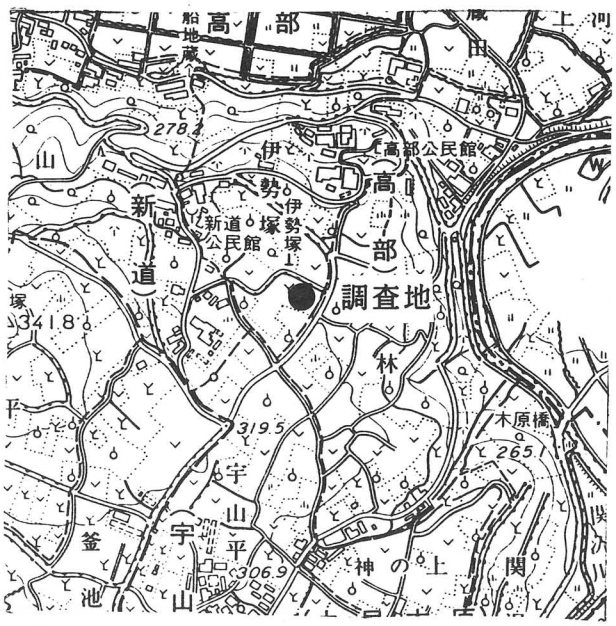
平成９年（1997）８月19日　発掘調査を開始
平成９年（1997）８月22日　文化庁に発掘報告を提出
平成９年（1997）８月26日　発掘調査を終了
平成９年（1997）９月１日　南甲府警察署に遺失物発見届提出

第２節　調査方法及び基本層序

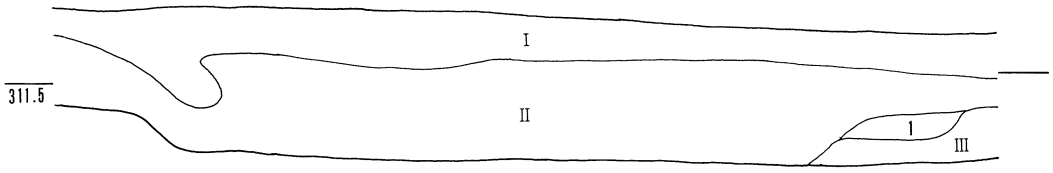
調査方法は調査対象地に応じて３×５ｍ、２×５ｍ、５×８ｍの試掘坑を３か所設定し、それぞれに１～３区と名づけ、ローム面まで掘り下げた。その時、３区の北側に落ち込みらしきプランが確認され、調査区を北側に３×５ｍ拡張して調査を進めた。

基本層序は次のとおりである。なお、地表から第Ⅳ層までの深さは50～70㎝である。

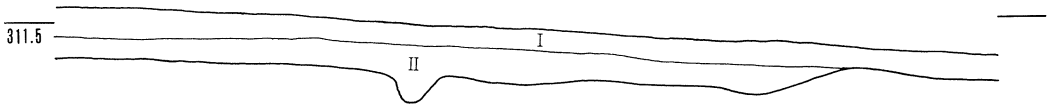
第Ⅰ層　褐色土（耕作土）　　第Ⅱ層　黒色土　　第Ⅲ層　暗褐色土
第Ⅳ層　黄褐色ローム



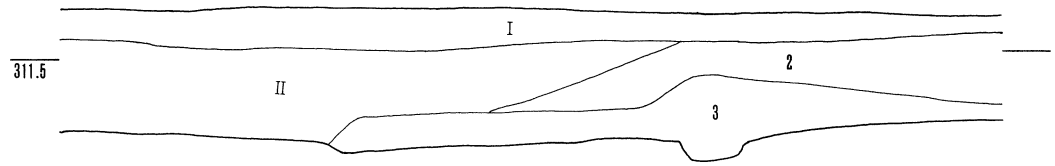
第４図　調査区位置図



第 1 区 西 壁 土 層



第 2 区 西 壁 土 層



第 3 区 北 壁 土 層

I 褐色土 しまりややあり 耕作土
II 黒色土 しまりあまりない
III 暗褐色土 しまりややあり
IV 黄褐色ローム
1 ロームブロック
2 褐色土 しまりあまりない 黒色土少し含む
3 褐色土 しまりあり 焼土粒・ローム粒含む
1号住居址の覆土

0 1m

第5図 土層図

第3節 検出した遺構と遺物

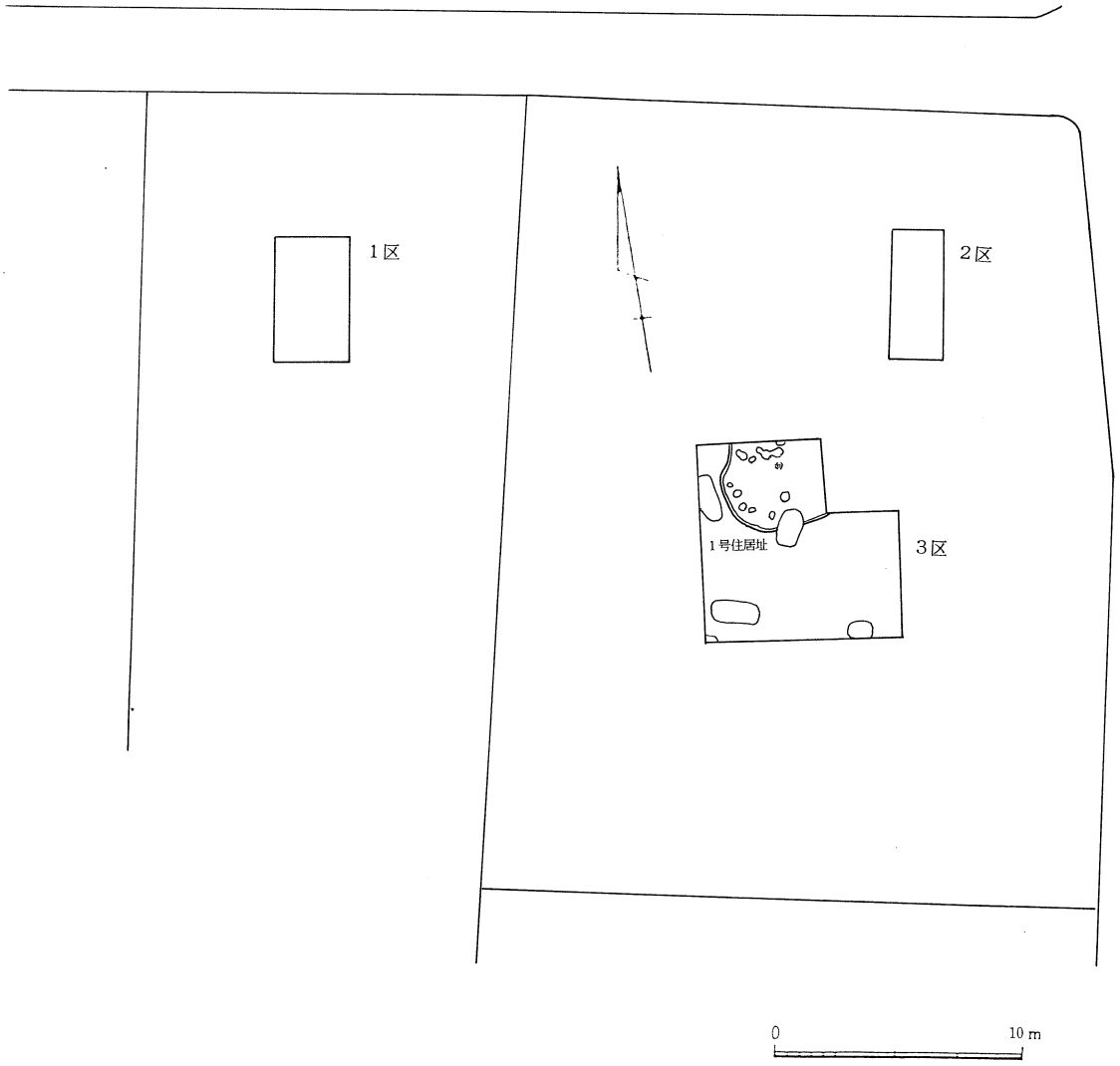
(1) 第3区の遺構と遺物

1号住居址（第7・8図）

3区の北側で確認され、3×5m拡張して調査を進め、プランを検出した。北側は調査区外に延び、南側の一部が撹乱を受けている。北東－南西方向の長さが4.5mあり、2区ではプランが確認されなかったので、全体的には9m前後になると思われる。壁高は確認面より12cmを測る。床面は平坦であり、そこに13基の小穴が確認できた。小穴の直径は20～50cm、深さは10～60cmを測る。そのうち12号小穴としたものが覆土に焼土が混入しており、炉址と思われる。

その炉の南隣に深鉢が正位で埋められていたが、その状況は土器の底部位を据え、その底部の土器を別の胴部の土器が囲むように据えられていた。土器の南側に焼土が一部見られたが、内部には全く含まれていなかったので、炉に使われたものではなく埋甕と考えられる。土器は底部及び胴部ともに縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器である。

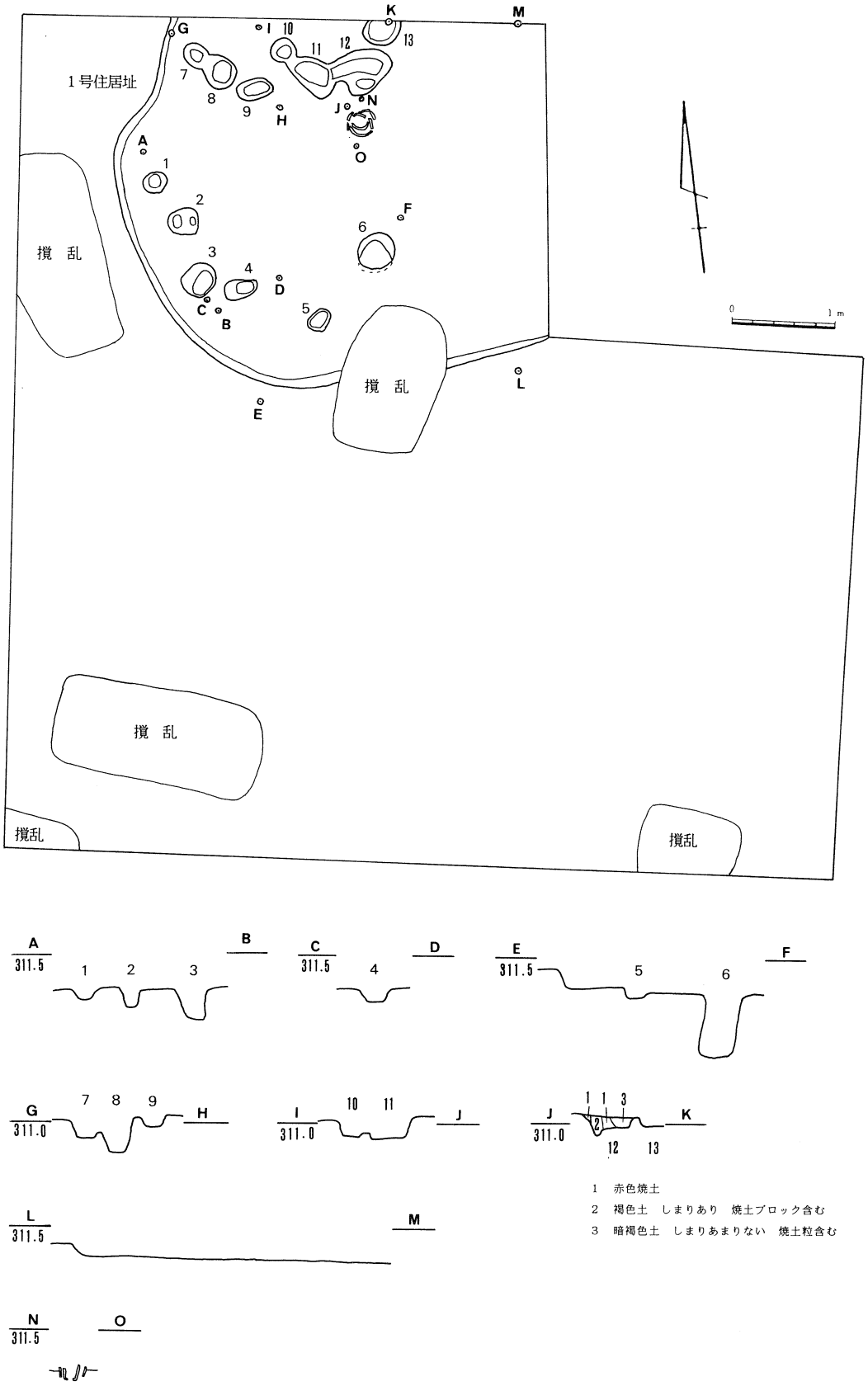
出土遺物は1が埋甕に使われたと思われる縄文土器の底部である。底径14.0cm、残存高16.0cmを測る。色調は橙褐色で、焼成は良好、胎土は砂粒を含む。文様は集合沈線文で、半截竹管



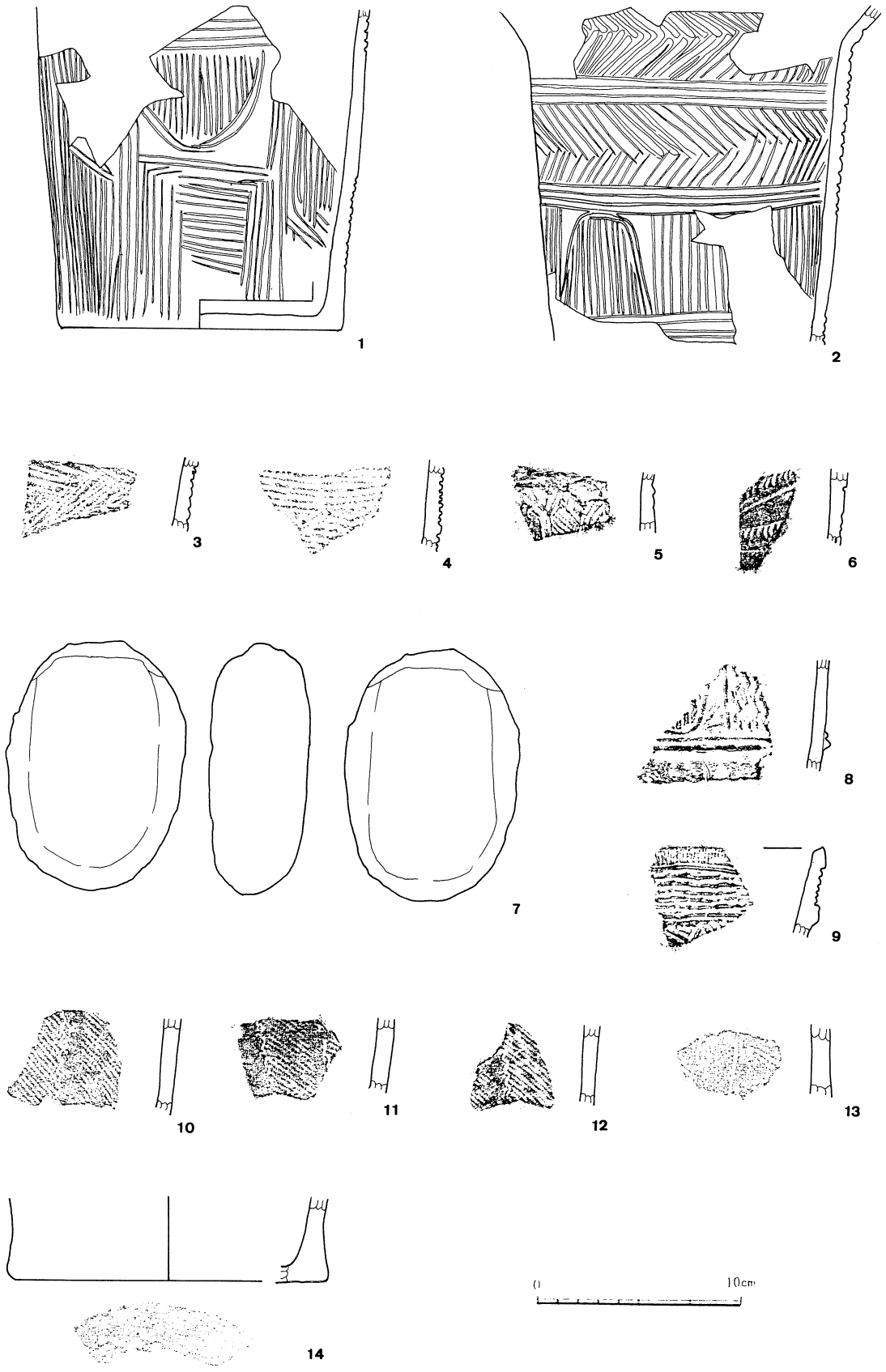
第6図　全体図

による工具で4本単位の平行沈線を全周させそれを区画とし、その下部には縦位もしくは横位に集合沈線で文様を描いている。2は埋甕に使われたと思われる縄文土器の底部を囲んでいた胴部である。上部で外傾し、外傾した部分の最大幅は18.6㎝を測る。色調は赤褐色で、焼成は良好、胎土は白色粒を含む。文様は集合沈線文で、半截竹管による工具で4本単位の平行沈線を全周させそれを区画とし、下段は縦位、中段と上段は矢羽根状に施文する。3は集合沈線文である。色調は薄い橙褐色で、胎土は雲母を含む。4も集合沈線文である。5は半截竹管による沈線文。色調は橙褐色である。5は連続爪形文を施している。胎土は金色雲母を含む。時期は1～5が縄文時代中期初頭の五領ヶ台式で、6は縄文時代前期後葉の諸磯B式である。7は磨石である。長さ12.4㎝、幅8.5㎝、厚さ4.7㎝である。

8～16はII層出土で、8は集合沈線文、9は押引きによる沈線文、10～12は結節縄文、13はハの字文である。16は縄文土器の底部で、底面に網代痕が残る。


1号住居址
撹 乱
撹 乱
撹 乱
撹乱
撹乱
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
311.5
311.0
0
1 m
1 赤色焼土
2 褐色土 しまりあり 焼土ブロック含む
3 暗褐色土 しまりあまりない 焼土粒含む

第7図 1号住居址



第8図　出土土器・石器

第4節　まとめ

調査の結果、３区より縄文時代中期初頭（五領ヶ台式期）の住居址が１軒検出した。この調査地周辺では、1972年、1990～1994年に調査が行われ、五領ヶ台式土器がいくつも出土しているものの、同時期の遺構は検出されたことがなかったので、今回が初めての発見となる。遺構外からも五領ヶ台式土器の破片がいくつか出土している。

なお、1990年の調査で見つかった方形周溝墓は今回の調査地の50m西とすぐ近くにあり、その続きが期待されたが、今回は古墳時代の遺構は検出されなかった。

第５章　横畑遺跡の調査

第１節　調査に至る経過

東八代郡豊富村大鳥居字横畑に所在し、御坂山塊から舌状に飛び出した曽根丘陵の台地状に広く立地する。

当遺跡の中心を東西に横断する形で村道ふるさと農道大鳥居線の建設の計画があり、試掘調査を実施した。調査面積は58㎡である。試掘調査終了後、引き続き本調査に入ったため、試掘分と本調査分をまとめて文化庁に報告し、南甲府警察署に遺失物発見届を提出した。

平成９年（1997）10月６日　発掘調査を開始
平成９年（1997）10月15日　発掘調査を終了
平成９年（1997）11月４日　文化庁に発掘報告を提出
平成９年（1997）12月10日　南甲府警察署に遺失物発見届提出

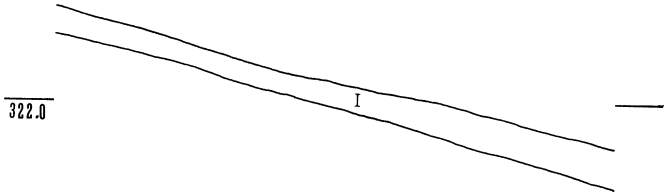
第２節　調査方法及び基本層序

調査方法は調査対象地に応じて幅1.5m、長さは任意のトレンチを７か所設定し、それぞれ１～７区と名づけて掘り下げた。

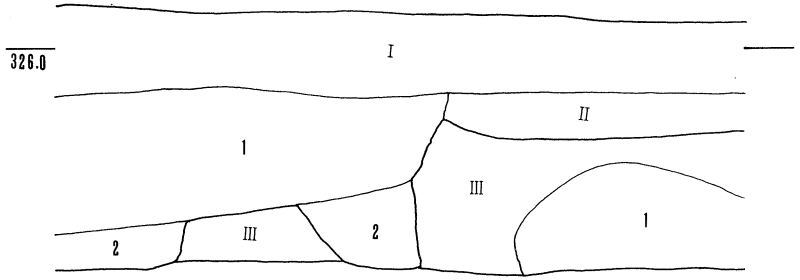
各トレンチの断面観察により、本遺跡調査区の基本層序は次のとおりである。なお、地表から第Ⅲ層までの深さは10～60㎝で調査区によってばらつきがある。

第Ⅰ層　褐色土（耕作土）　　第Ⅱ層　黒褐色土　　第Ⅲ層　黄褐色ローム

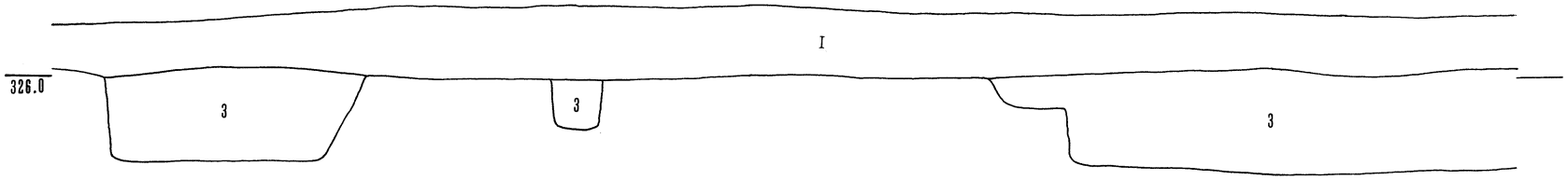
第９図　調査区位置図



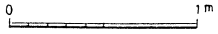
第 1 区 北 壁 土 層



第 2 区 北 壁 土 層

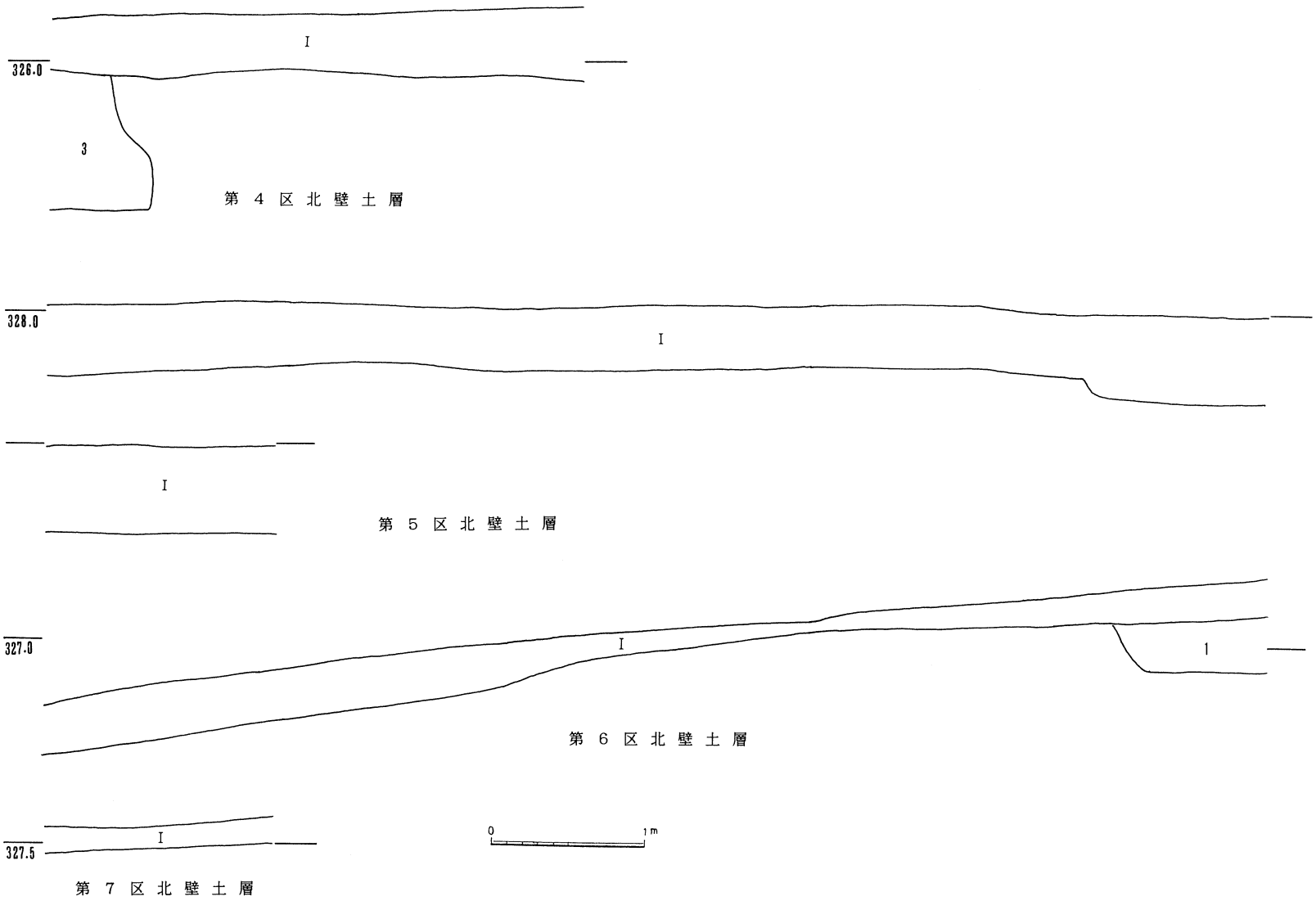


第 3 区 北 壁 土 層

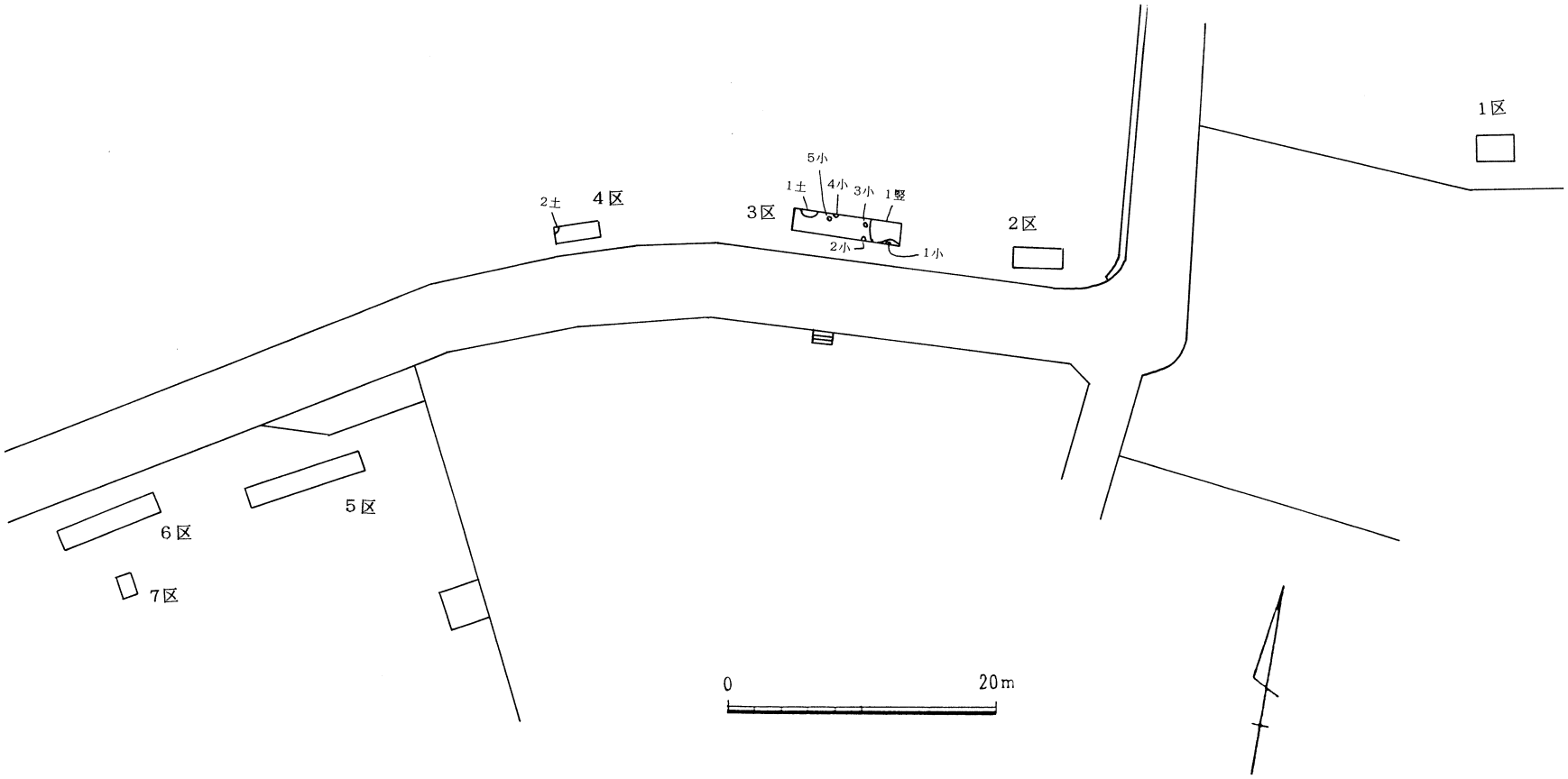


I　褐色土　しまりなし　耕作土
II　黒褐色土　しまりあり
III　黄褐色ローム
1　褐色土　しまりなし　ロームブロック含む　攪乱
2　暗褐色土　しまりなし　ロームブロック多量に含む　攪乱
3　暗褐色土　しまりなし　ロームブロック含む

第10図　土層図(1)


326.0
I
3
第 4 区 北 壁 土 層
328.0
I
I
第 5 区 北 壁 土 層
327.0
I
1
第 6 区 北 壁 土 層
327.5
I
第 7 区 北 壁 土 層
0
1m

第11図　土層図(2)



第12図　全体図

第３節　検出された遺構と遺物

(1)　第２区の遺物（第15図）

Ⅰ層出土で、１は口径11.2㎝、底径6.0㎝、器高2.5㎝、色調は橙褐色、胎土は密で金色雲母を含む。内外面ともに横ナデで、底面に糸切痕が残る。２は口径12.2㎝、底径7.0㎝、器高2.5㎝、色調は橙褐色、胎土は密で金色雲母を含む。内外面ともに横ナデで、底面に糸切痕が残る。

３は美濃灰釉皿で、内面は丸のみによる削ぎが菊花状に施され、口径10.0㎝、色調は黄緑である。

(2)　第３区の遺構と遺物

１号竪穴状遺構（第13・15図）

３区の東側に位置し、トレンチの1/3を占める。北側及び東側は調査区外に延びる。隅丸方形プランを呈しているものと思われ、東西幅260㎝以上、南北幅150㎝以上、壁高は50㎝を測る床面は平坦であり、壁面は急な立ち上がりで、トレンチの北壁土層を見ると、西側の立ち上がりの上部が段上になっているが、これは崩落したためと思われる。覆土は暗褐色である。柱穴や炉のようなものは見つからず、本遺構は古代の住居址ではなく、中近世の竪穴状遺構と考えられる。

出土遺物は４が内耳土器の口縁部で、口径11.0㎝、色調は暗褐色で外面にすすが付着している。その他、覆土に混入して５～９のような縄文時代中期後半の土器が多数出土した。５は縄文地、６は条線地、７は半截竹管による条線地に蛇行隆線、８は条線地、９は半截竹管による沈線を施す。

１号土坑（第13図）

３区内の北西に位置し、北側は調査区外に延びる。平面プランの形状は不明であり、東西幅150㎝、深さは50㎝を測る。立ち上がりは東側と比べて西側の方が急である。床面は平坦である。

出土遺物はない。

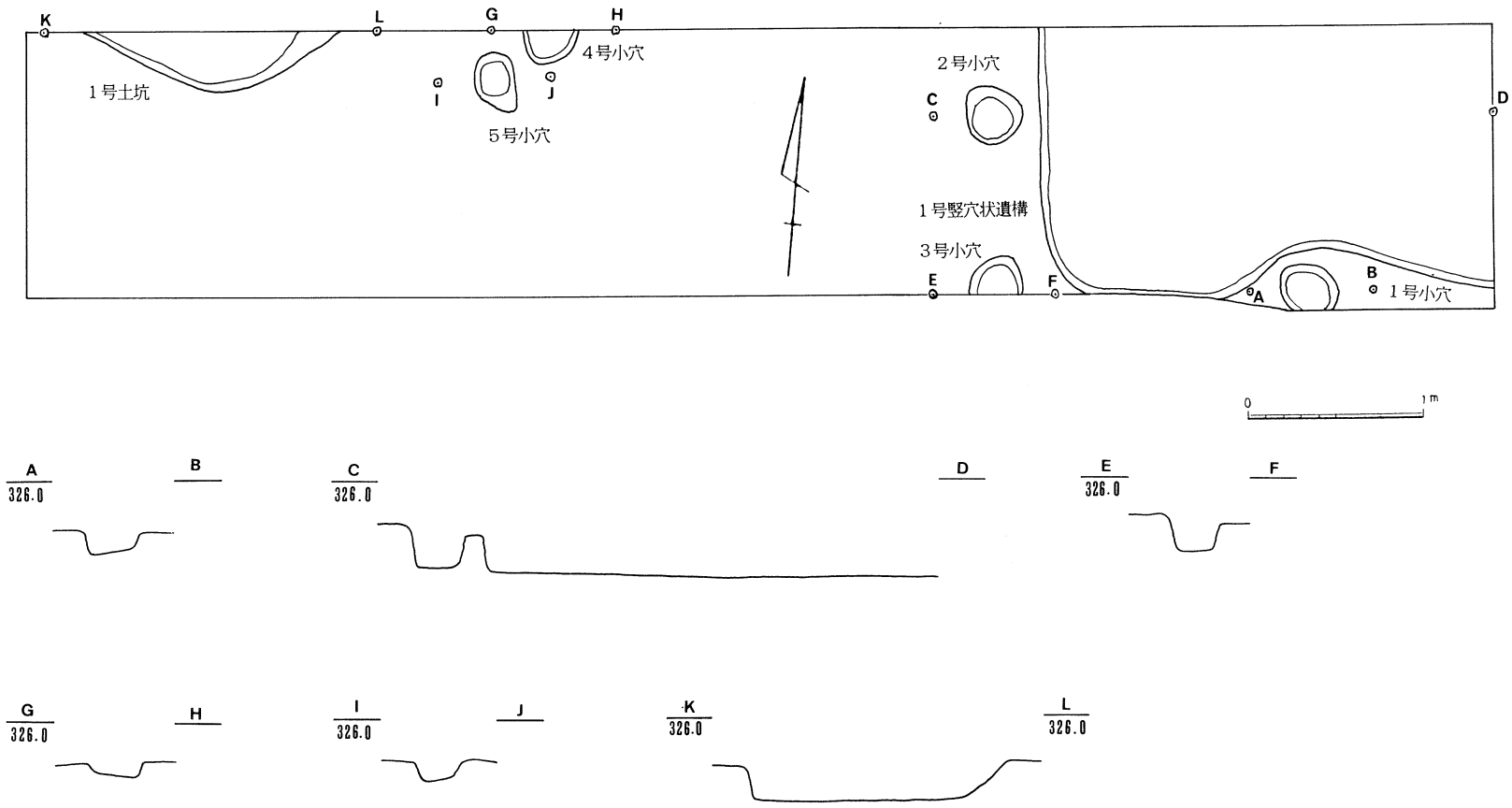
１号小穴（第13図）

３区内の東側、１号竪穴状遺構の南側に位置し、北側及び西側は調査区外に延びる。平面プランの形状は円形であり、径30㎝、深さ14㎝を測る。

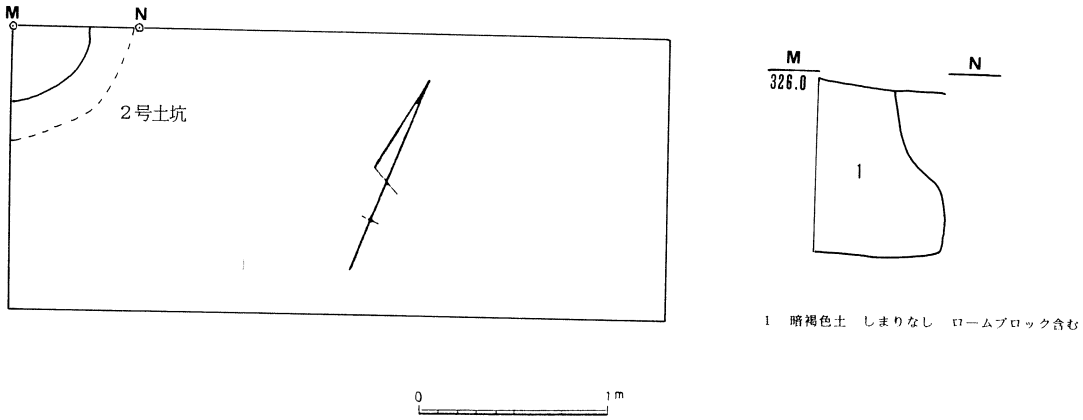
出土遺物はない。

２号小穴（第13・15図）

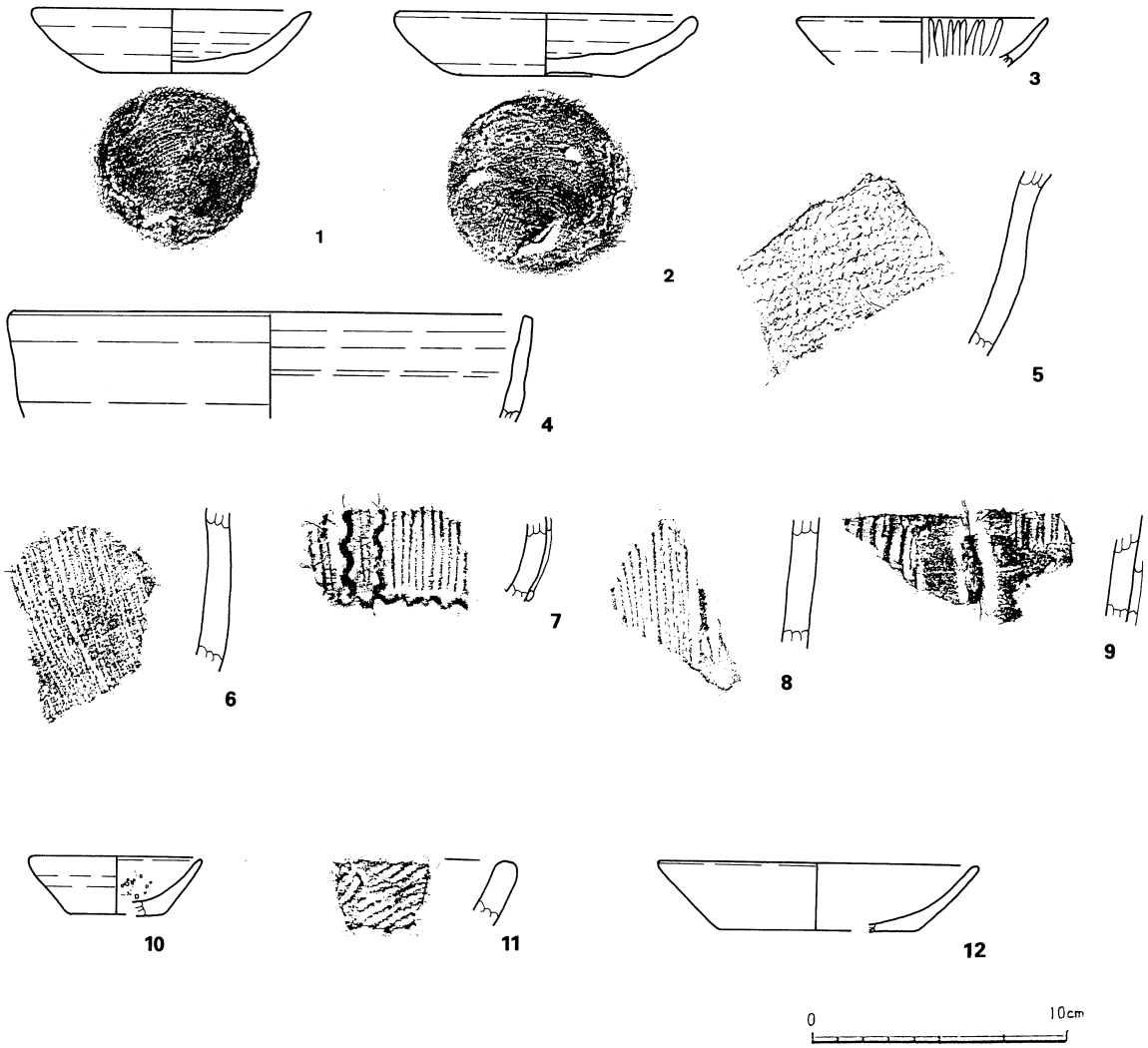
３区内の東側、１号竪穴状遺構の西側に位置する。円形プランを呈し、径30㎝、深さ20～25㎝を測る。


K
L
G
H
1号土坑
4号小穴
I
J
5号小穴
2号小穴
C
D
1号竪穴状遺構
3号小穴
E
F
A
B
1号小穴
0
1m
A
326.0
B
C
326.0
D
E
326.0
F
G
326.0
H
I
326.0
J
K
326.0
L
326.0

第13図　第3区



第14図　第４区



第15図　出土土器

出土遺物は縄文土器の破片が１点と10の融解物付着土器の破片が１点出土した。内面に融解物が付着している。

３号小穴（第13図）

３区内の東側、１号竪穴状遺構の南西に位置する。南側は調査区外に延びる。円形プランを呈し、径30㎝、深さ17～21㎝を測る。

出土遺物はない。

４号小穴（第13図）

３区内の中央部、やや西寄りに位置する。北側は調査区外に延びる。円形プランを呈し、径30㎝、深さ９㎝を測る。

出土遺物はない。

５号小穴（第13図）

３区内の中央部、やや西寄りに位置する。だ円形プランを呈し、径30㎝、深さ９㎝を測る。

出土遺物はない。

(3) 第４区の遺構と遺物

２号土坑（第14図）

４区内の北西隅に位置し、北側及び西側は調査区外に延びる。平面プランの形状は円形であり、東西幅40㎝、深さは90㎝を測る。立ち上がりは下部でオーバーハングしている。床面は平坦である。

出土遺物はない。

(4) 第７区の遺物（第15図）

Ⅰ層出土で、11は縄文土器の口縁部で、施文は縄文地。12はかわらけで、口径13.0㎝、器高2.7㎝、色調は褐色で胎土は雲母を含む。

第４節　まとめ

本遺跡は1985年、山梨県教育委員会により笛吹川農業水利事業に伴い調査が行われ、縄文～平安時代の住居址７軒や中近世の竪穴状遺構や小穴群が多数検出した他、先土器時代のナイフ形石器や縄文時代～中近世の土器や石器が多数出土しており、その調査地は今回の調査地と隣接しており、同様の遺構の検出が期待され、調査の結果、３区から４区にかけて中近世の竪穴状遺構が１基、小穴５基、土坑２基が検出された。この部分については本調査を行うこととする。

第６章　代中東遺跡の調査

第１節　調査に至る経過

東八代郡豊富村木原字代中に所在し、甲府盆地の南側から東側に連なる曽根丘陵の北へ張り出した台地上に立地する。

当遺跡内の西端で個人住宅の計画があり、試掘調査を実施した。調査面積は８㎡である。

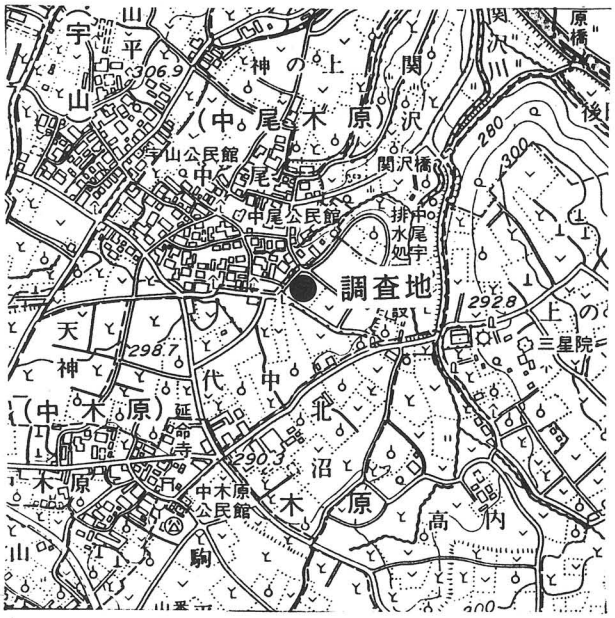
平成９年（1997）10月20日　発掘調査を開始・終了
平成９年（1997）10月20日　文化庁に発掘報告を提出
平成９年（1997）10月22日　南甲府警察署に遺失物発見届提出

第２節　調査方法及び基本層序

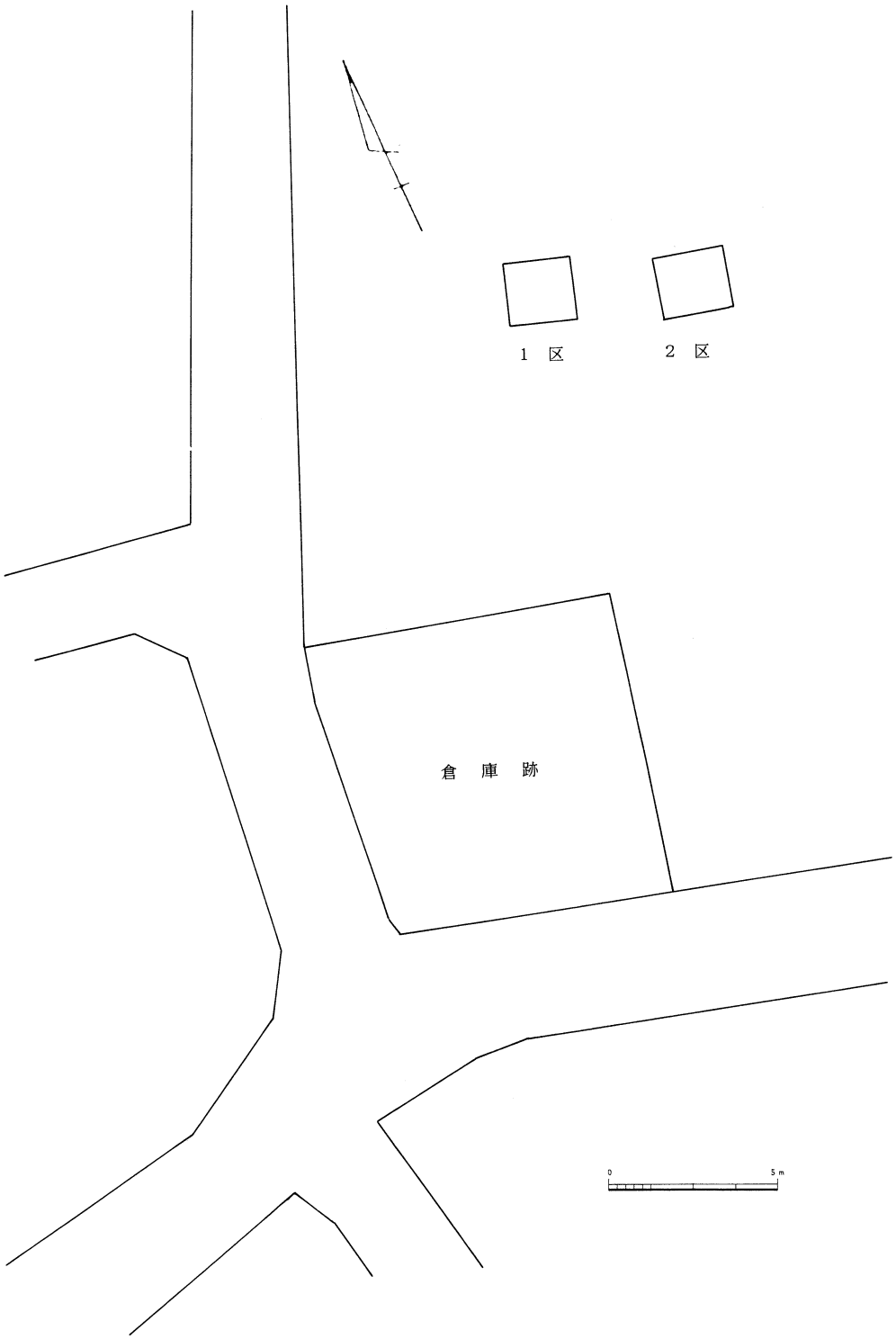
調査方法は調査対象地に応じて、２×２ｍの試掘坑を２か所設定し、それぞれに１～２区と名づけ、ローム面まで掘り下げた。

基本層序は次のとおりである。なお、地表から第II層までの深さは10～30㎝である。

第Ｉ層　褐色土（耕作土）　　第II層　黄褐色ローム



第16図　調査区位置図



第17図　全体図

第３節　検出された遺構と遺物

(1)　第１区の遺物（第19図）

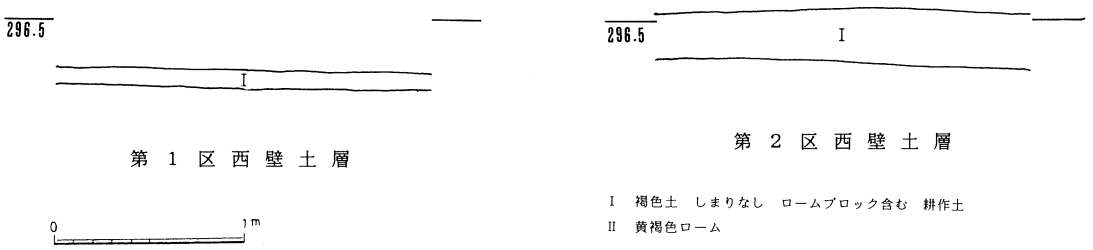
第１区では遺構は発見されなかった。Ⅰ層出土として１は縄文地に沈線文を施したもので、時期は縄文時代中期初頭の五領ヶ台式期である。２は凹石である。長さ9.6㎝、幅7.5㎝、厚さ5.1㎝を測る。安山岩製である。

(2)　第２区の遺物（第19図）

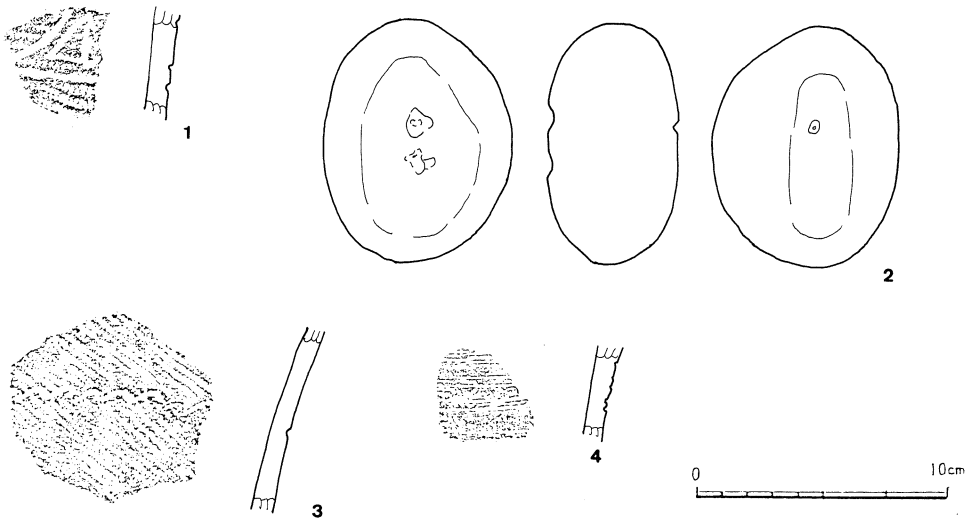
第２区では遺構は発見されなかった。Ⅰ層出土として３は結節縄文で、時期は縄文時代中期初頭の五領ヶ台式期である。４は縄文地に半截竹管による沈線文を施す。時期は縄文時代前期後葉の諸磯Ｂ式期である。

第４節　まとめ

調査の結果、縄文時代前期後葉から中期初頭にかけての土器や石器が耕作土から出土したものの遺構は検出されなかった。



第18図　土層図



第19図　出土土器・石器

第７章　弥二郎遺跡の調査

第１節　調査に至る経過

東八代郡豊富村関原及び木原地内に所在し、甲府盆地の南側から東側に連なる曽根丘陵を形成する台地頂部に立地する。

当遺跡内の中央部、関原字弥二郎地内で土砂採取の計画があり、試掘調査を実施した。調査面積は231㎡である。

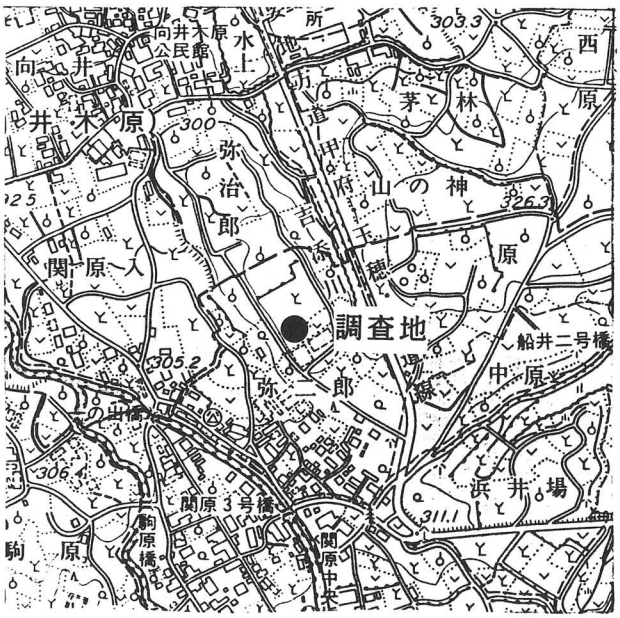
平成９年（1997）12月９日　発掘調査を開始
平成９年（1997）12月10日　文化庁に発掘報告を提出
平成９年（1997）12月16日　発掘調査を終了
平成９年（1997）12月18日　南甲府警察署に遺失物発見届提出

第２節　調査方法及び基本層序

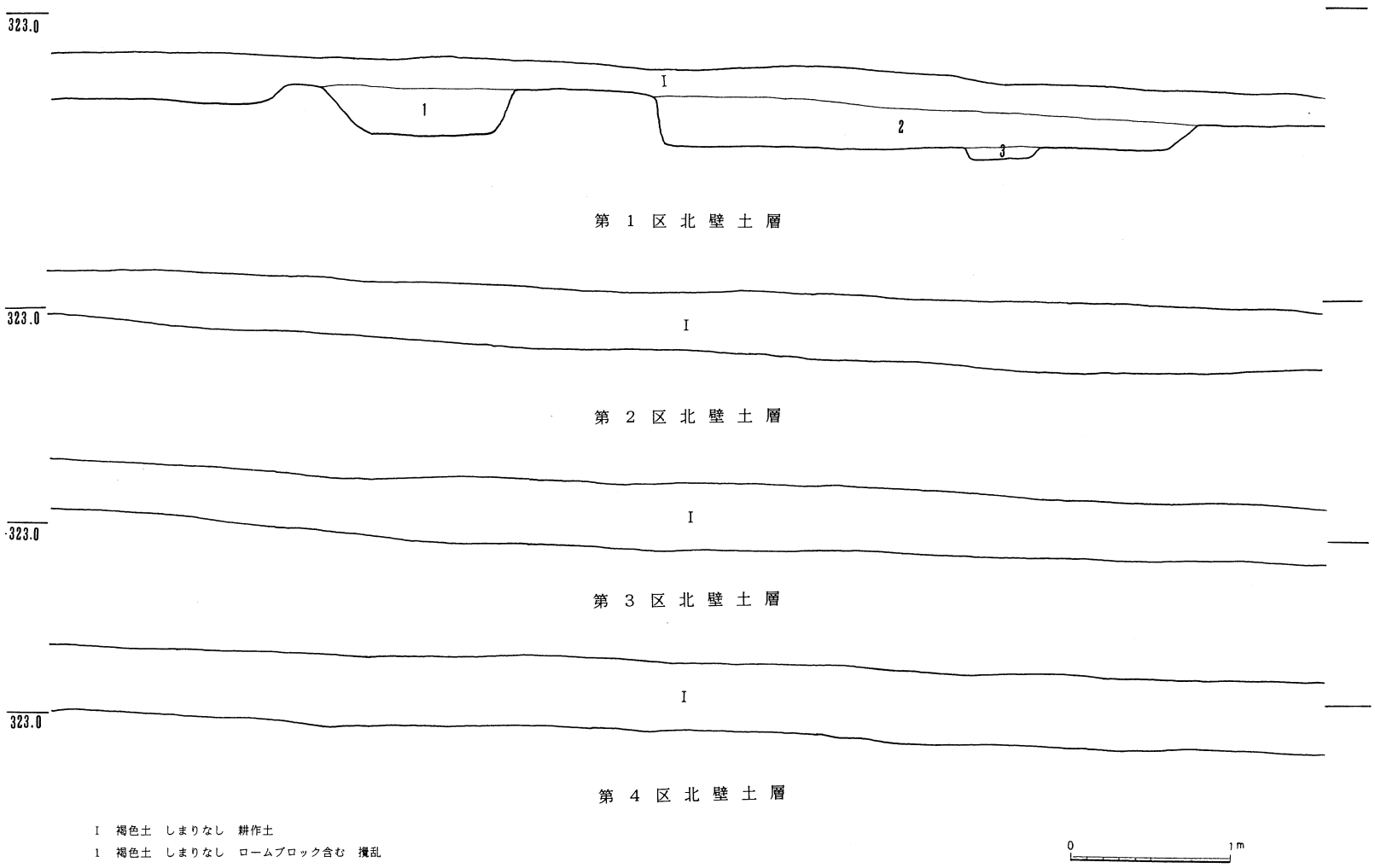
調査方法は調査対象地に応じて幅1.5～２ｍ、長さは任意のトレンチを15か所設定し、それぞれに１～15区と名づけて、ローム面まで掘り下げた。

基本層序は次のとおりである。なお、地表から第II層までの深さは15～55㎝である。

第Ｉ層　褐色土（耕作土）　第II層　黄褐色ローム

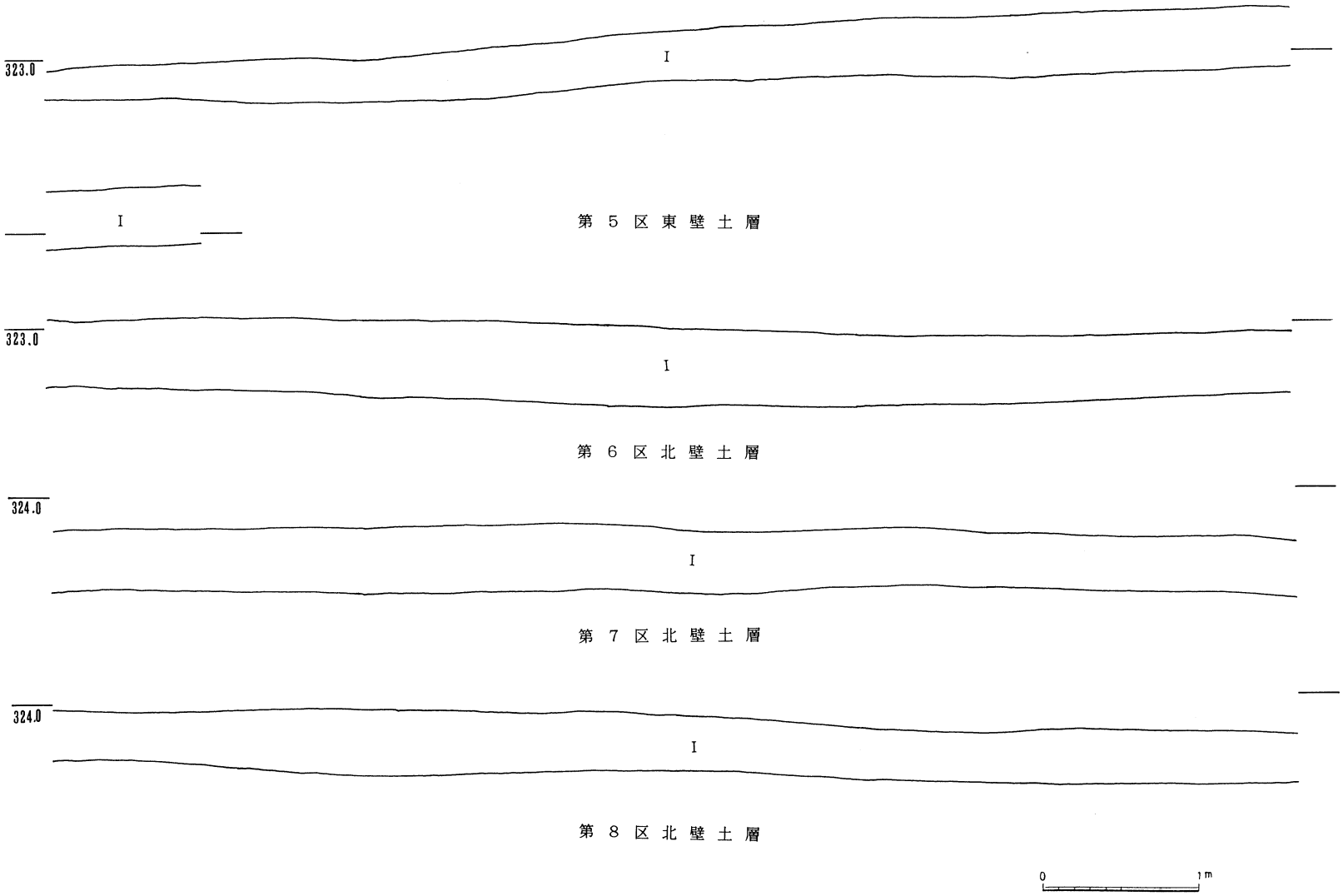


第20図　調査区位置図

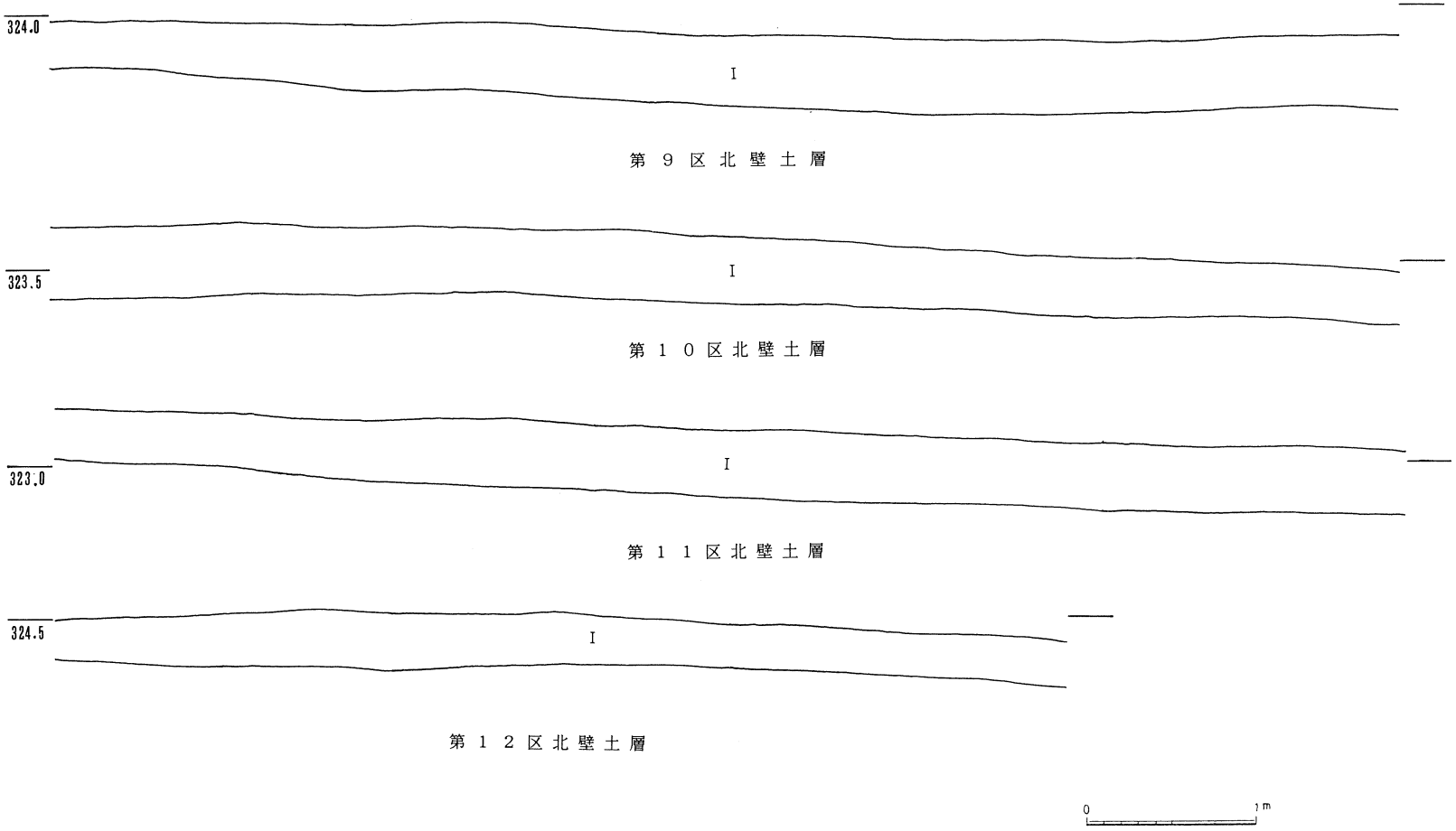


I　褐色土　しまりなし　耕作土
1　褐色土　しまりなし　ロームブロック含む　攪乱
2　明褐色土　しまりあり　黒色土含む　焼土・炭化物含む
3　赤色焼土　固く締まっている

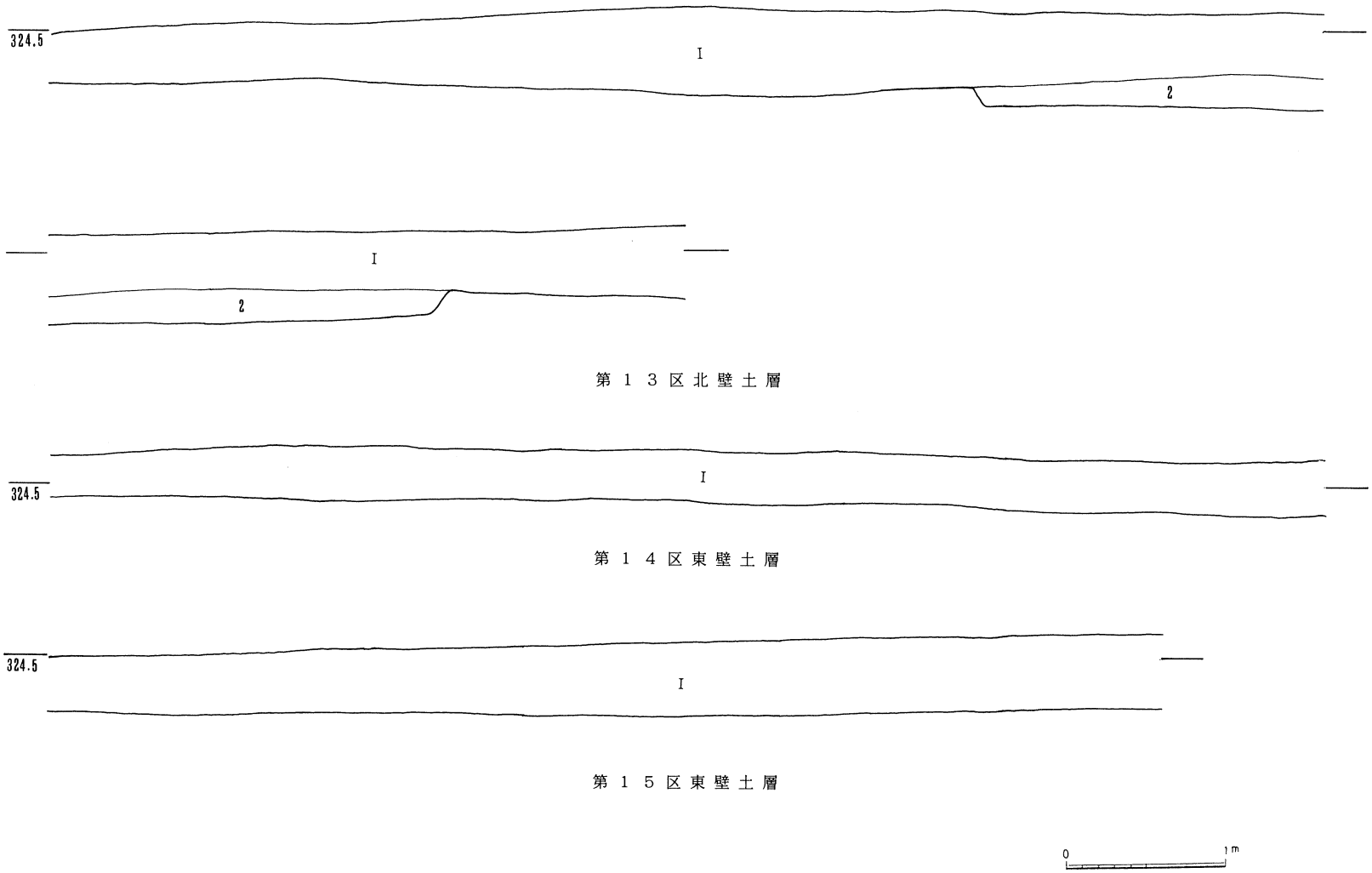
第21図　土層図(1)


323.0
I
I
第 5 区 東 壁 土 層
323.0
I
第 6 区 北 壁 土 層
324.0
I
第 7 区 北 壁 土 層
324.0
I
第 8 区 北 壁 土 層
0
1m

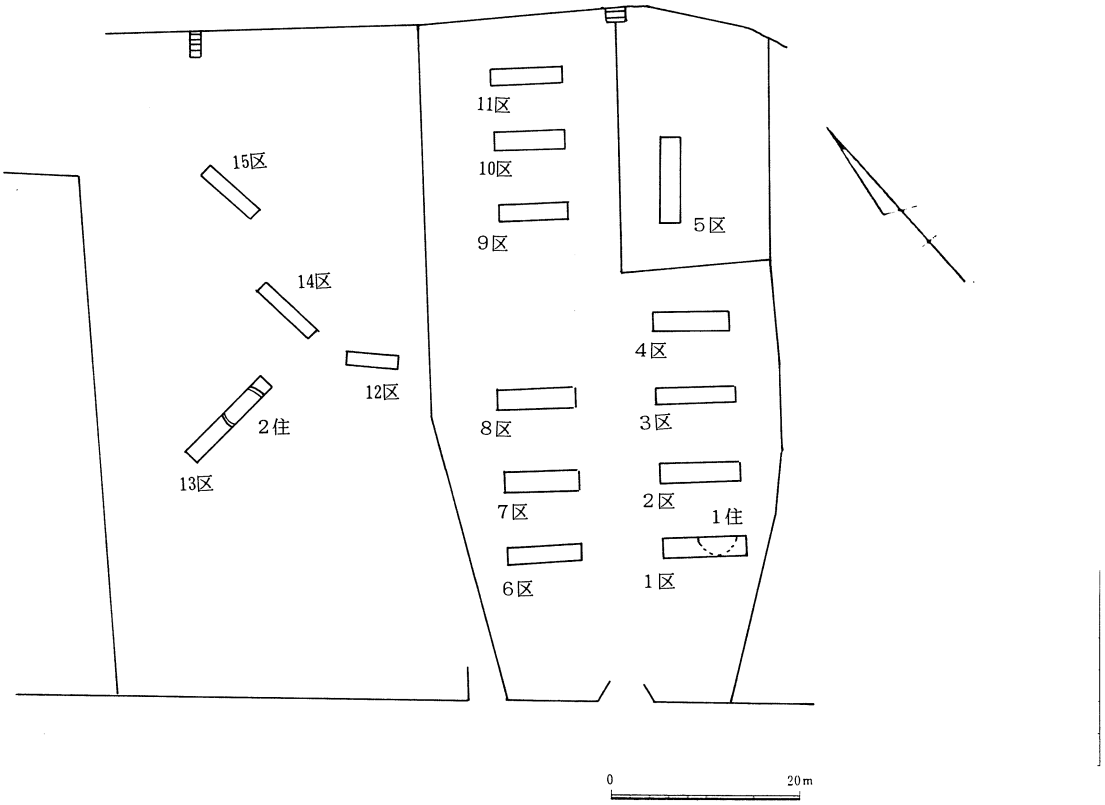
第22図　土層図(2)


324.0
I
第 9 区 北 壁 土 層
323.5
I
第 1 0 区 北 壁 土 層
323.0
I
第 1 1 区 北 壁 土 層
324.5
I
第 1 2 区 北 壁 土 層
0
1m

第23図　土層図(3)



第24図　土層図(4)



第25図　全体図

第３節　検出した遺構と遺物

(1)　第１区の遺構と遺物

１号住居址（第26図）

１区の東側に位置し、北側は調査区外に延びる。遺構確認精査を行っていた際に、固く締まるローム面が見つかり、炉と思われる焼土ピットも確認できたことから住居址と判断した。表土はぎの時に壁の部分を削り過ぎてしまい、トレンチの断面を見ると壁面の高さは20～30㎝、住居の東西幅は340㎝である。床面は平坦であり、住居の中央やや東寄りで、炉と思われる焼土ピットがあった。その焼土ピットの東西幅は45㎝、南北幅50㎝以上、深さは10㎝である。20～30㎝の礫が２つ並べて据えられていた。柱穴は確認できなかった。覆土は明褐色土である。

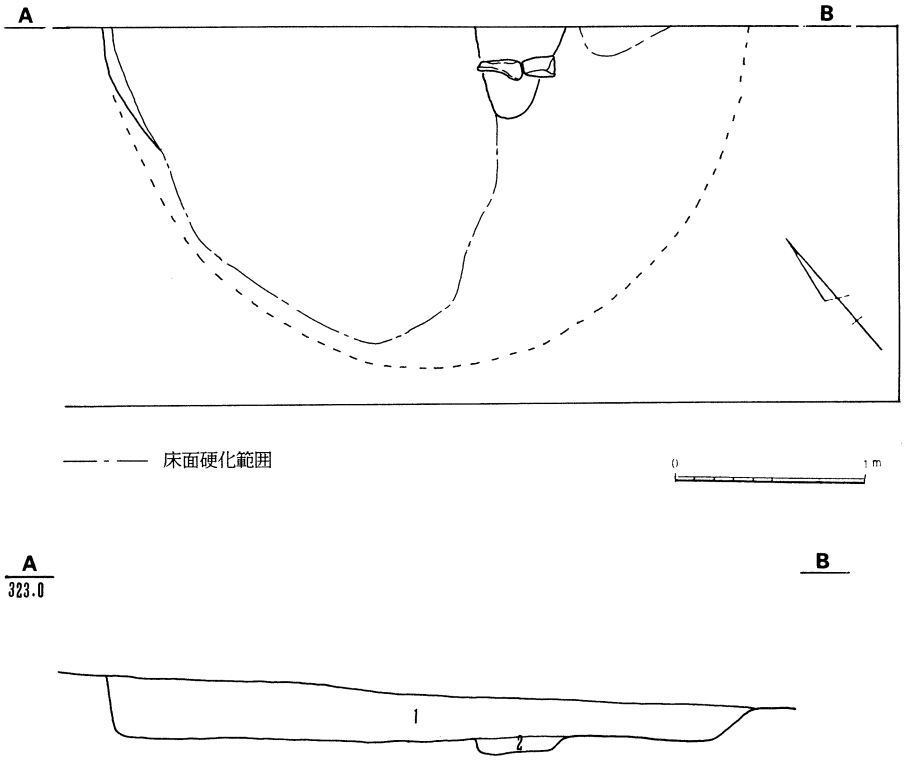
出土遺物はない。

(2)　第12～14区の遺構と遺物

２号住居址（第27・28図）

13区の東側に位置し、北側と南側が調査区外に延びているために平面プランは不明である。東西幅470㎝、壁高10～20㎝を測り、床面は平坦である。トレンチの南壁付近で東西幅30㎝、南北幅20㎝の焼土ピットが見られる。柱穴は見つからなかった。覆土は明褐色土である。

出土遺物は弥生時代後期と思われる壺の破片がいくつか出土し、１はそのうちの１つで、底



第26図　1号住居址

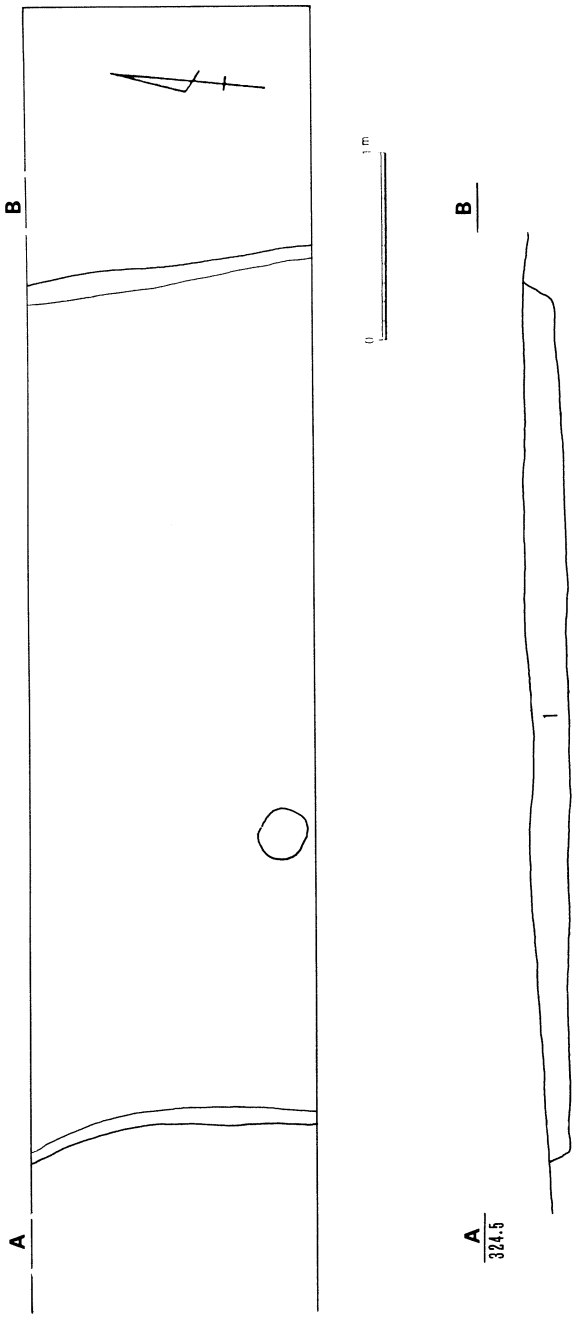
部位である。外面はミガキ、内面はハケメ調整を施す。底部外面に木葉痕が残る。色調は橙褐色で、胎土は白色粒を含む。2はハの字文を施し、縄文時代中期末の曽利Ⅴ式土器の破片である。

Ⅰ層出土として、12区出土の3は櫛歯状工具による沈線文を施し、縄文時代中期後半の曽利Ⅳ式、12区出土の4は口縁部の内面を押引により曲線を描いた縄文時代中期初頭の五領ヶ台式期の浅鉢の口縁部と思われる。14区出土の5は隆線に押引を施し、縄文時代前期末の十三菩提式と思われる。（第28図）

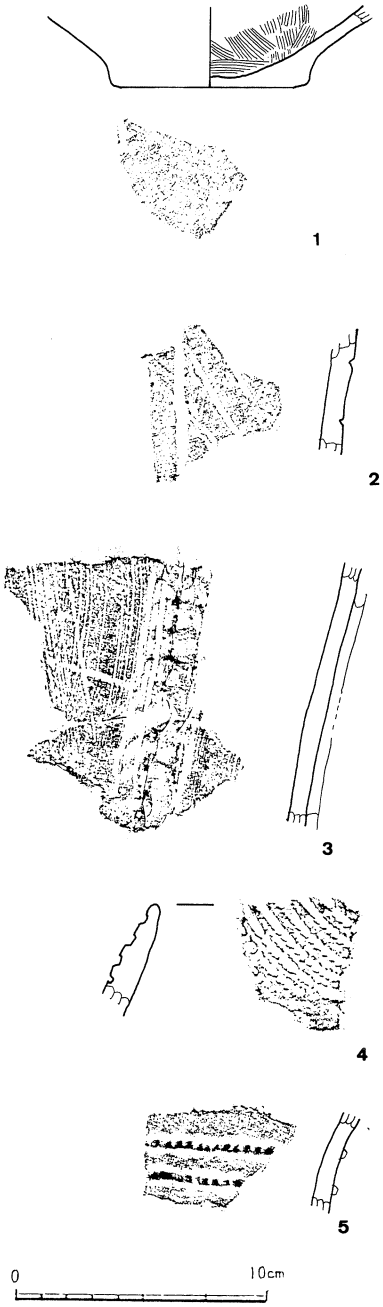
第4節　まとめ

調査の結果、弥生時代後期の住居址が1軒と時期不明の住居址が1軒の計2軒が確認され、耕作土からも縄文時代前期末から中期末の土器や石器がいくつか出土した。1号住居址からは出土遺物がなく、時期を決定することは難しく、2号住居址の覆土と同じ土であり、弥生時代後期の住居址の可能性が高いものの時期を確定する材料が乏しいため、今回は時期不明としておく。

本遺跡は1985年、山梨県教育委員会により、笛吹川農業水利事業に伴い調査が行われ、弥生時代後期の住居址3軒の他、先土器時代の石器や縄文時代～中近世の土器や石器が多数出土し



第27図　2号住居址



第28図　出土土器

ており、その調査地は今回の調査地と同じ畑地内であり、同様の遺構の検出が期待され、調査の結果、弥生時代後期の住居址が分布は薄いものの、点在していることが明らかとなった。

引用・参考文献

森和敏他　1973　『金川曽根地区大規模農道建設及び畑地帯土地総合改良事業関係埋蔵文化財緊急発掘調査概報』　山梨県教育委員会

保坂康夫　1987　『横畑遺跡・弥二郎遺跡』　山梨県教育委員会

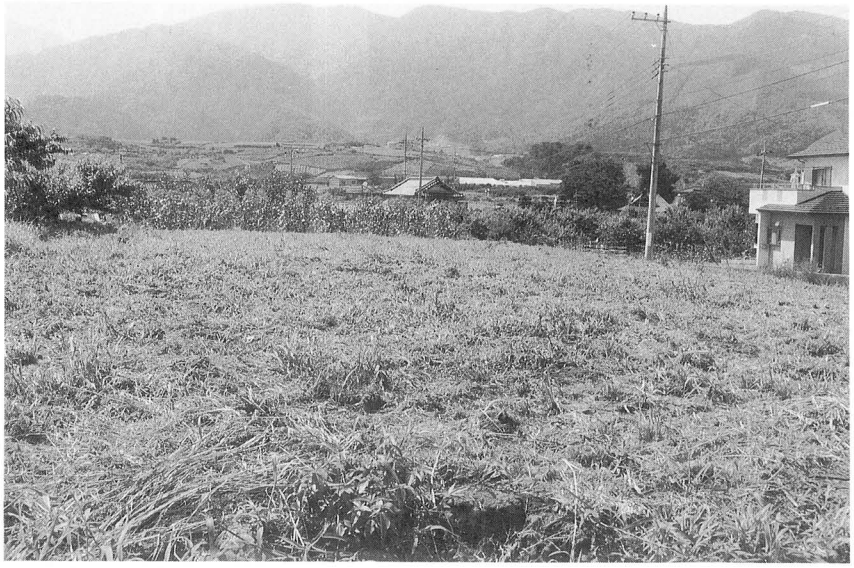
岡野秀典　1993　『高部宇山平遺跡』　豊富村教育委員会

岡野秀典　1995　『高部宇山平遺跡II・浅利氏館跡・三枝氏館跡』　豊富村教育委員会

岡野秀典　1997　『平成７・８年度村内遺跡発掘調査報告書』　豊富村教育委員会

岡野秀典　1997　『遺跡詳細分布調査報告書』　豊富村教育委員会

図版1　代中遺跡



調査前風景

完掘状況

図版2　高部宇山平遺跡

調査前風景

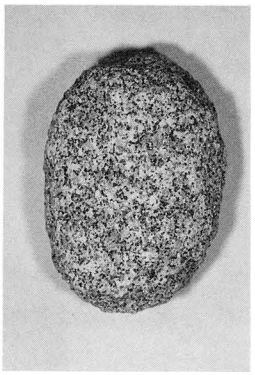
作業風景

1号住居址

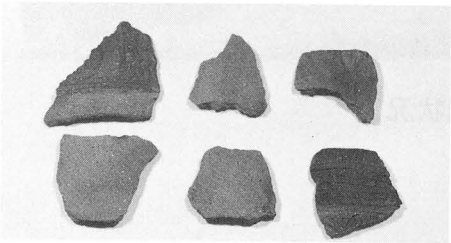
1号住居址埋甕

埋甕内側

埋甕外側



磨　石

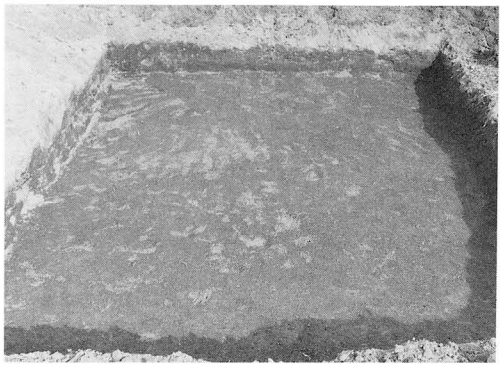


縄文土器

図版3　横畑遺跡(1)

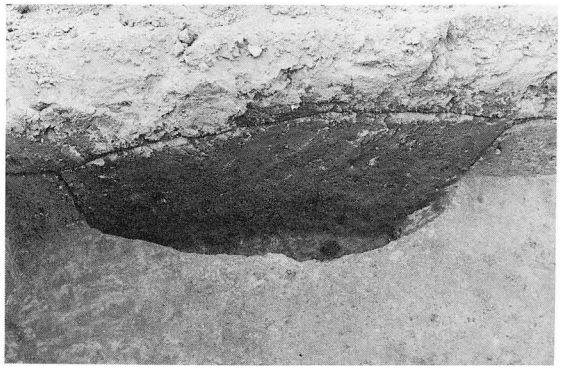
調査前風景

作業風景



1区完掘

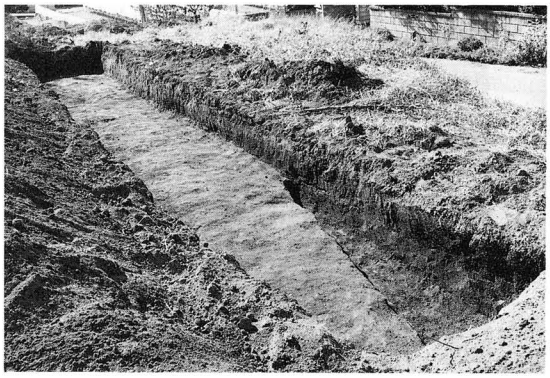
1号竪穴状遺構



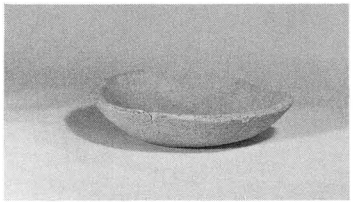
1号土坑

2号土坑

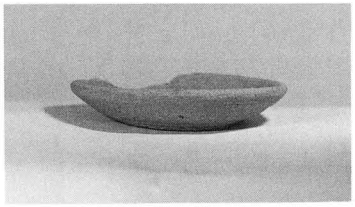
図版4　横畑遺跡（2）



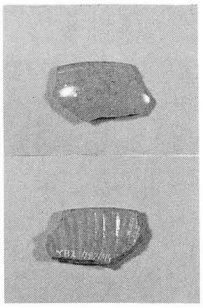
5区完掘



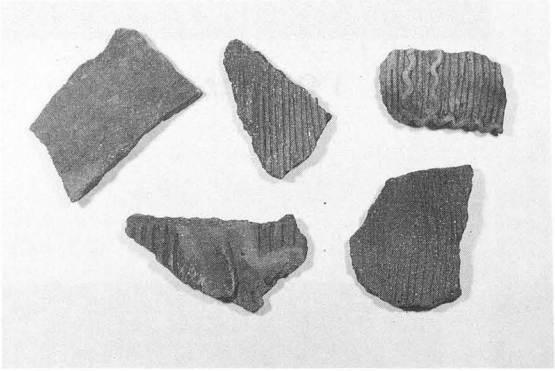
かわらけ



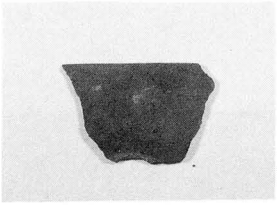
かわらけ



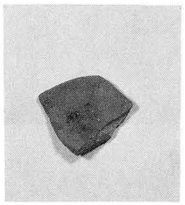
陶磁器
（上・外面）
（下・内面）



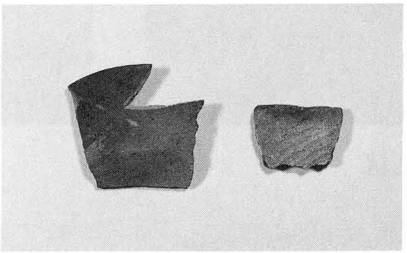
縄文土器



内耳土器



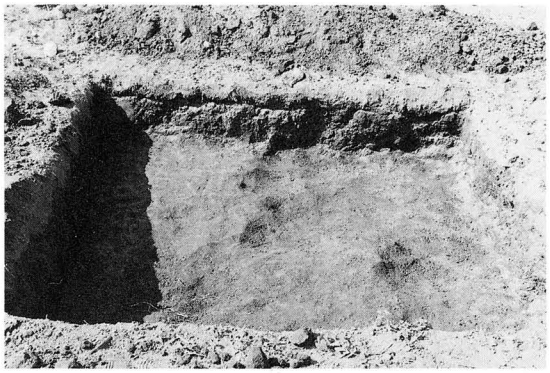
融解物付着土器



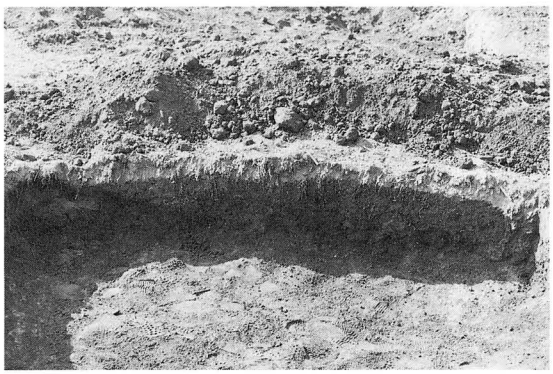
かわらけ・縄文土器

図版5　代中東遺跡

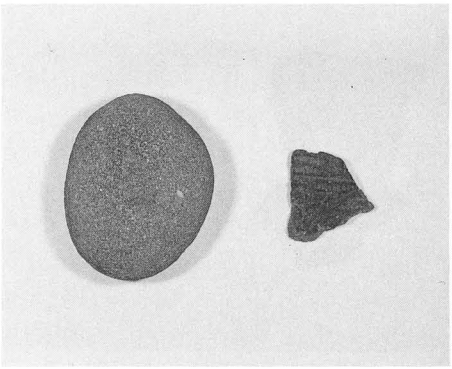
調査前風景



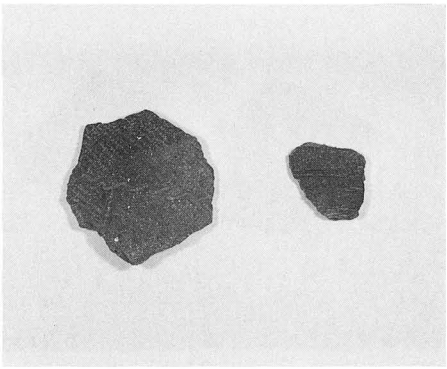
1区完掘



2区完掘



石器・縄文土器



縄文土器

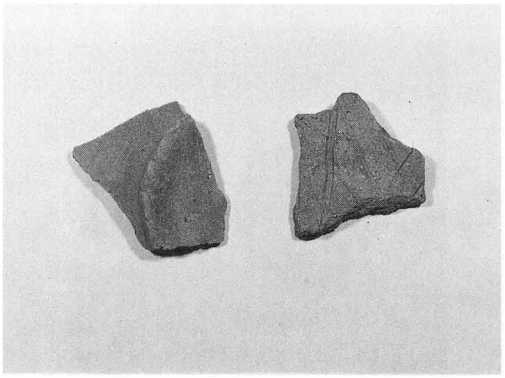
図版6　弥二郎遺跡

調査前風景

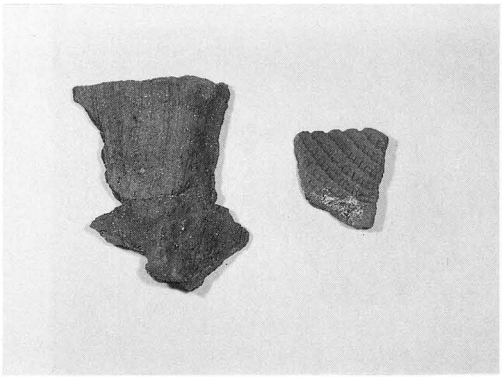
5区完掘

1号住居址

2号住居址



弥生土器・縄文土器



縄文土器

報 告 書 抄 録

ふ り が な	へいせい９ねんどそんないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書 名	平成９年度村内遺跡発掘調査報告書
シ リ ー ズ 名	豊富村埋蔵文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第５集
編 著 者 名	岡 野 秀 典
編 集 機 関	豊富村教育委員会
所 在 地	〒400-1594 山梨県東八代郡豊富村大鳥居3866 TEL 0552-69-2447
発 行 年 月 日	1998年３月31日

豊富村埋蔵文化財調査報告第５集

平成９年度村内遺跡発掘調査報告書

印刷日　1998年３月31日
発行日　1998年３月31日
発行所　豊富村教育委員会
〒400-1594 山梨県東八代郡豊富村大鳥居3866
印刷所　㈱エンドレス
〒405-0014 山梨県山梨市上石森123